和訓栞

加之部

六下

津田文庫
文庫1
1604
7

早稲田大学圖書館藏書

# 倭訓栞前編六

## 加の部下

洞津　谷川士清　纂

△かる　神代紀ニ手伐ヲみるふ哉ヲよめり歎キ之辭ナリ書經の前哉ヲ哉ヲ傳の諸哉ハ口以為然心不以為然之意トヒ禮記乃祭哉ハ疑而量度之辭ト注セリ又歟夫ヲよめり又也欤也哉乎哉矣哉トモ用ル日本紀ニ哉字ヲかねとよめり万葉集ニモかなとつゞきヲかねトモかもトモよめるもの多シ後世ハ多くかなとよめりこれハ事情ヲ商量しく歎キもる意ヲハ歎の色ニかなりまたる也とゞ哉留ニ唯てふはの哉ハ〇鉋ヲかるとつふ万葉集ニ真がるとてもとたりケハかんるとよめり鉋ハ鉋の誤ケふつれかる也とよめり全漸兵制ニハ推鑼ヲたきがるとヲ譯セリ萬葉集ニかるとよめる辭ニ鉋字ヲ用ル菅家万葉集ニ鑿字ヲ用ル也同ジ鑿ハやりがる也又さをがんるとよめるもかしハ皆鎗かんるヲ用ヒし百年前より突かんるヲ起きりとよめり薩州乃鉋ハ両翅ハり西ニふ同しみぞがんると呼ハ天工開物ニふ起線鉋也捅工れる

早稲田文庫

010190596066

と正直とふ卧準とこゝゆえ九がんがんがうがんがんがう○有に河ふよめるゐ名あり
或ハかゝ濁りくらう萬葉集よ敍得字冀字顔字かど成ゐる是也かゝと
ふ何れ物ゆゑ成一長くとがかゝとかりしけるゐれ類ハ二意をかちく看
べし金葉集ふ

秋おらぐ妻ふ鹿と聞しゐ折ら色れ分よハ色ひとこハ聞てしが

ゐと頼ふ意也とこゝ○猫成かゐとふハひかれ金澤れ文庫ふ韓猫のり
からうり書と取よせたゐふ船中荒乃防ぎふ猫と載ゐしよりそのそぢれ
猫をひ初めたゐ也と物ふこくたり○出羽ふハ魚の成をとかゐとこゝ○假
字とふかりれ名の義也文字れ字をとゐとあるゐ日本紀ふこたり
かゐふ　稱字遂字諧字周字適字叶字副字協字ゐど成よめり兼合れ
義ゐゐべし称あゐ也所ふ名ゐふ分ふかゐふとあゐハ適ゐ副ゐ
ゐべしロ語れ道ふかゐふハ周願のかゐふハ遂也○所名ふ加納とふハ御厨
ゐとれ如く公役ふ能くの名也東鑑ふ美濃國椎加納とこたり伊勢
れ村名ふ神納とあり○賀名生の行宮ハ吉野ふたり



かゐぎ　倭名抄ふ鉾又鉞とあり金木れ我也本邦れ刑具ふ鈦鑕と施せし
せられと後ハ堅木のふ成用なり一説よきハ刃又ふく輪の如くゐゐりくよりく
ふとゞ日本紀の所ふかゐぎつけわがふとゐとこたり万葉集のふりごし也
○文選古剣ふ莖字とあり又鐘撞鐘とゐゐハ大ふの相称ハさゐとふ註よ
ふ木枝也とこゆ中臣祓ふ天津金木とゐゐ是也中古れ物ふ橋板のゐゐ木
ともこたりゐ奥州よハ代河在せりとこ○倍語ふもゐゐげゐかゐ木
ふ目とつゐゐどこり伊勢の南山濃州山家の樵夫ハ柴成かなぎとふといり
○神代の古波よ近江國栗生郡ハ上古ふ倭栗樹ゐりく其根ざしれ数里
ふ及び一郡の人今ふ掘く晨皆の薪ふ用り是と名けく金木とふとこゝ
たゐふハ名山成と指くこり○菊ふさく事とゐげとゐ同しかこ毋多
かゐ　倭名抄ふ釜とあり金冠の成也又丸かゐとこり新撰字鏡よ鑊
もあり又鎧とゆゐゐとあり○鼎とゐしがゐとこり説文よ鼎ハ三足両耳
とこゆ指生集物名ふもこゆ日本紀よハかゐとあり○かゐ石ハ志摩國伊雑
宮の由緒ゐりく近代ふ正鼎石従鼎石とく一雙ゐり朝野僉載ふ辰州れ

鼎足名れ類也

かるめ　扇梢と扇眼とをつゞる雙眼と似たるを也之義卿行宗家集みをもふ
れめとよめり源平盛衰記よりはかのうとゝゆされど數眼とも得るハいかゝ○延
暦儀式帳ふ盤眼釘ありて今ふ俗やり釘ゝるゝ○相馬百官に要をかるめ
とよむと朝より出たり○樹ふつゞハ朝梢ふたふ木也とゝり芽出ー紅華ふ
かるらぞ　必とよく紀ふ要をとゝり假ふらぞれ義也とゝり一說ふ數ふらぞ
れ義疑ふき意也とゝり必矣を今ハ音みくよむを日本紀ふかるらぞとよ
むとりく其義ゝ〻ぞーゝ不必の時ふかるらぞーゝとよみまわり詩の緩ふ
ふをりく也不定の辭也要ハ多く要當とにくり○必也とゝるハ也ハ助也か
ふらぞとふらぞ管子ふ必則とゝる○果決をよむと史記の注ふ果猶決也
とゝたり○六朝以來の史ふ多く必字を用ゐれ亦會字を用うとゝり
總要也と注せり

かるーむ　悲哀をつゞる神代紀ふ流涕をよみ金粟乃義ふるーー秋金粟殺
れ意ふり萬葉集ふも鈍深とゝりまみむもみくゝさらゝされと萬葉



ふ又可柰之備とゝもゝりふくゝゝふかるゝふとあと通せり千載集ふ
ゝくふるーかりゝり昔ふも秋の必殘りまくとひられ○萬葉集ふ
をかれ意ふるーとつゞるとの多ーゝ今集れ序ふ殘殘かるーゝふ保氏ふかる
なゝりもふ妻ふ可ふはるぐるもるとゝるハ淮南子注ふ哀然愛也と
ゝ字書れ哀ハ憐也と注せるる意也とゝりされハ可怜をあゝれともれりるア
ともよるハつるくかるーゝもハれりるき意ふるより定家々の說ふくゝるゝり
かるだゝみ　古事記ふ蝦人神代紀ふ作金者とよりり新撰六帖ふ
かりハまくゝゝもゝふあふひ鍔ふありるかるだゝみれ
かるつなわ　倭名鈔ふ結棹を剖せり日本紀ふ金綱并とゝり金綱ハ鈦索を
つゞる今俗ゝ称つるべとつゞる是也○神鳳抄ふ朝明郡金綱御厨とゝゆ延喜式ふ
金綱驛とつゞる是也藻塩草ふ鹿塩草ふハ哥撫村とゝり今れ繩生村也とゝり
△かふ　哉と万葉集ふかもとよりりふかふ二つれてゝはとゝく疑の辭ふよりるも
侍り顯昭の說ふだかりふとつゞる辭也とゝるハかゝ○雙ハ皮冊の義ふるーー萬葉集ふ
加保とゝとりみたりゝさゝふよりひ其整人れ首を新とのりりとゝゆ腹中れ黄ハ月ふ意

すく盈觴也○新撰字鏡に蠻を海かふとよめれと蠻八七さみ也倭名鈔に八ゆわつめとよめり○近代御代れ御製に

みるくれうに目のいきさ接ふゆく葦間れかふのわとれ世の中横行せるをも

く桀歩れ名にうつ今人刀鮫の飾ゆ七代物伐志り又教の蟹たつまりく蛇をき

て食ふと云ハ本草に能與虎鬪虎不如也と云ふと信也云〳〵○蟹八甲ふ似せく

穴と堀とつふハ思不出其位の意也

かふとり　貴人の産長とつふ蟹取の義也勘取とハ引〳〵ひ石語拾遺に昔天客

尊れ生きたまつる時に海多ふきハ蟹と排ひ除くる代て其義よりれる也

○小兒初生の時小腹の出るをかふとつひ出生後初くまる胎屎をかふとつふ

みふ国義かるへ〳〵

かふかくふ　日本紀に東西をよみ萬葉集ふ云云とよめり又かふとかくもと

とゆ彼に此に也とかくとつふに同〳〵

かふハぎとり　倭名抄に樺とかふとよめり萬葉集ふ櫻皮をかふと訓也

香庭櫻の義ゆくかバは略せるゆや原氏ようかぐさうに同〳〵古今集物名ふ

かつけとも浪のおりよハさちもさく風吹とふ法法ひ玉○太櫻底國林に多〳〵

實代塩義ちるをとうハるとつふ近代世の勅名也と云り代奇より知たる歌〳〵

かふとりぐさ　細草也蔓草れ如〳〵其葉相對とに是と生兒の産儀ふ用ゆるハ

蟹採の義也又紱稻と豫知とに代産帶ふもたるみとこ又産長と贈るふと是

と添くれるをと古法とに云り山槐記に治承二年御着帶後典藥頭和

氣定成朝臣持參仙洞に二七狂自基盤所方献之中將局取之縫付御帶左方

とこ之たり仙洞に八豫知れ一名ふるより本草ふ云たりるのぶ月るハ謬也

△かぬ　兼とよめり加祢ふとつふ祢ふ又ぬ也又色とよめり人目をかねるふとつふ

と是ふり

かねち　日本紀に鍛とよめり金打の義祢ふ又ぬ也新撰字鏡に八鐥字とよめり

二合字成〳〵○世人狂眼人とかねちとつふハ鍛工の祖神に天目一箇命の名ふる

とりくせとそうさんとがんちとそ云ハ眼一の音也とそ云り江府ふくハかんだ

とつふ神田の明神ようる都ふとそうり○歐羅巴の内に日國ふり近代に蝦夷

と攻ふとつふ也先年蝦夷のきいたつふの者数百里漂流しく一嶋ふ住きたり

代後人男女皆眼也とふきいたるふより北ふかるとも

△かゝ　日本紀ニ哉をかゝとよみ今ふかるを也古今集ニ人もこゝろかふふるらせよと顕昭のかゝふハかゝとつゞくく神樂譜ニハくもこゝろつくとろとも○金を

ふハ堅練れ義なるべし金ハ五金ハ總名也口語ふつゝと然りされと東國ハくもりつゝふとものハ黄金也京師ハくもりつゝふハ銀也○曲ニとつゝも金ハ義也

さゝがゝを畠ハ鋼鉄ニよりて遊ニ朝野群載ニ鐵尺ニてくり○足利文書部

京治川の之陣の時ニ金ふ後しくなるまちもるとるも云かゝの義也とゝ

志二文字をとるとゝ今もまがゝとゝり○鐘とよゝハ高音の義也とゝり

よくく猪の鳴とハ奇ニよるまぬ之と新續古今集雅世ハ何ゝもよゝり後ニ

たゝがゝとふ時の猪ゝり軍鐘ゝり梵鐘ゝり○鐘と朝ふつくく新ときし

ゝ禹の時ふ起りく紀邦ゝも孝德天皇ハ代ふて鎌倉將軍ハ時ゝ也ゝ

ゝり○千載集ニ

高砂の尾上ハかゝの音もゝり晩ゝくゝやゝくらん是ハ山海經ふ豊山ニ鐘霜降而自鳴とふよゝゝり東方朝傳ふ未央宮前殿鐘無故而自鳴三日とゝ





鐘の御崎ハ筑前也海底ニ海流をくゝりとゝり長さ二丈八尺餘とふ宗像大

司左衛門興氏文明中ふ代後を引んとをけるゝ風雨長かりられハ止ときとを

○馬のかゝハ印也○歯黒のかゝハ鏽鉄水也平家物語ニ黒也とをかゝつけ

ふ○伊勢物語ニもこがゝ栄花物語ふきさられかゝをどるハ豫の義なるべ

しゝゝかゝ物ニ東宮ふ之たまふべきを坊がゝとをこゝりとかゝ也がゝハ尚歯會

記ニよゝ○江刀海津の宿ニ金とゝる遊女ゝり之力なるゝ著聞集ニよゝ

かゝる　兼とよゝり金ハ云の中ふ兼くられハ金ゝり堅ゝる河也とゝり新撰字

鏡ふ該とかゝたりとよゝり○成ゝかゝる行ゝかゝる出ゝかゝる入ゝかゝるとふハ

難んをる意なるべハかくとつふふ通ゝり萬葉集ふゝりをひゝかゝくゝを相爭不

勝とをゝ得とゝかゝとよゝりゝ不甚の意ゝり○待ゝかゝハ拾津國玉敷ハ南也

かゝく　兼くれ義ゝかゝくをゝ

ゝよゝ有ニよゝる代義多ゝかゝ

ゝよゝゝりがゝもを亦通也

かゝこと　豫言なるゝ

ゝかゝくゝゝりゝひゝゝる言の葉紙ふ也豫事の義也

かゝ

かゝ糸うつ　俗ふ誓く再びせるゆふつり鐘撞れ我るゆ〜埃嚢抽ふ三井寺れゆに鳴起請鐘とゝゆ又金打と音ふつゆも是ゆゆ〜園槻鮫ふ諸社氏人退其地不再帰心決時叩鍔鉦為誓とゝ明徳記ふ涼く塑りく八幡宮れ鰐口とゆらしく神水を飲ミ誓約をそゝりゆゆとゝ宇治拾遺ふ大佛のれゆ人ゆく金うちく佛ふやくさりぬとゝたり又源氏れ行ふ

かゝ糸つけくとちめんとゝ八さゝたりふゝゆゆ八ゆやゆき紀ゆふ童部の謗ふ無言ゝ行ぜんと幼東〜く先言くとゝり〜ゆふ待つくとゝふく何ふくゝもおゆ〜くゝれより抱つゝぬゆ我をゆ也又八講ゆどの論議の時證義者ゆ糸とゝ八威儀師磬とおゆらをその後論義と止ゆ也とゝりゝゆ八ゝゝゆ乃義ゝまひの條考看〜法事講ふ無言行道ゝ面ゆどゝり

△かの　彼ゝ其ゆ我剖せりこのとゝ也せり彼八此ふ對ゝ重〜夫八婉ふ〜く輕〜ゝとゝり○賀能八葛野の名桓武御宇の遣唐ゝ使藤原葛野麻呂也忘例ふ剖とゝくゝよみ〜八誤也○姓ゆ狩野坂よめり伊豆の著姓也本系工勝ふ図〜



かのむ　中臣祓ふゝたり嚼呑れ我也とゝひ伊勢度會郡よかのみ川ゆりゆ我ゆりとゝり一説ふかゆ後治かよゆれかの如〜とゝり○倭姫世記よかのみやふひとゝゆゆゆやゆ八盆也されゆ倭ふ腰ゆ杯とゝゆゆゆゝ我也と神祇ゆ

かのこ　鹿の子也染色ゝふ八ゆ時ゆれゆ漢ゆ八荔支殼文とゝゆ○章ふふ八排草也とゝり又春ゆめ〜とふ敗醤ふ似く春死ゆるゆゆく也ゆ根と和名松とゝ真ふゝゆゝ又一種ゆり夏白花を開く葉と花ゝ下野草ふ似たり○かのこ多八白鼈也

かのふげゆさ　新撰字鏡倭名抄ふ人参をゆり鹿の齧草れ我ゆるゆ〜埃嚢按ふゝたり倭名抄ふ藥鹿曰齧ゆげゆむとゝたり鹿八ゆく良藥と別つゝゆゆゆゆ八名ゝ也〜歳〜〜延喜式諸國れ貢ゆゆゆゆ多くゝ人参を載たり和の人参と称ゆる物今十餘品ふ及てりゝゆゆ指たゆゆ知ゝゝれ

△かゝ　何れ結ゝゆゆふふ八さかゝ疑ふくさゆくふゆゝゝと加〜くゝふ緒豈ゝゝゆ字れ意やゝゆり八意ゆりとゝゆ又八と句調の助けふ用ゆたゆゆゆり又如此者

意ふよあるなり彼宿を初めたるとそうる也とそう○河又川をあひハ書
せ義逝水の昼夜ふとてあ〳〵ハ渕瀬の移て変るをいふ世人の墜開きたるハ
渠也又水をとみ〳〵る日本紀禹乗集ふ又たり○刀祢川吉野川筑後川
を之大河とハ俗ふ坂東を郎四國次郎筑紫三郎とそう○是如次よあゆ
くいのくもぐもれハ橋我ハ仁せるとそたるより水行川とハ三河ふ
ハ稽のまふあり源氏よ前ゆく川をるん泊瀬川とそ〳〵にとりあゆく川と
ハ泊瀬川ふるる也とそう○家居ふかしとそふハ東鑑ふ東類西類とそたた
て東坡集注ふ類宇内地常語宮室之房曰類猶又之顧類也とそうされも
かれれ稽治ふるべ〳〵ふづ西づるどふがゆ〳〵今人側字を用くかハとあう
桶板を桶のかハとそひ舟れ枋をとをかハと祢〳〵とどう小奇頭かハるとそふを同義
成〳〵○皮をとりむを身れ外類ふを ハ同義ふる〳〵倭名抄ふ甲をあるハか
ふれ音稽也皮れ訓ふ義ふるるや○獸の皮を鞍張とそふ國史ふそ西去ふ
かハのまを皮張とそう○木の根皮を鬼皮とそう○河の江の城ハ伊豫ふとり
かも 倭名抄ふ樺を訓〳〵今櫻皮有之とそう玉篇ふ樺ハ木皮名とそたり

今檜物師のをふ櫻皮をかゞとそう是也禹乗集ふを櫻皮をかゝと訓〳〵かふ
ハを死化をる弁とあり新撰六帖ふをから行の笛ふまくてふかばざくら又近江
ふるひとの里れかゞざくらとあみ職人所合ふを
あふるハをまゞとぢめれさくらかゞるゞかりとをれりハざりしが○今かハ
ざくらとふハ死のかゞ系色ふるふ櫻也黄櫻とそふ或ハ大櫻乃一名とそ樹ハ似
く死ハ似つそ賞をそれ死ふふたるふ櫻とそふ或ハ源氏ふ花りうきかゞ櫻の咲みされた
ふをとそ俗ふたとそふものハ別種ふや
淺みとそう世色れ者ハをめとをかまてく白ふかしさくらふる徽書記の説
ふかゞざくらハ二重櫻也或ハ重のうを紅ふく艶ふる死なりとをそう○右今案雅
拔ふ絹の色れりく稷芳ふ裏薄色ふるをかゞざくらとそふとそう樹皮れを小ちれ
ふるゆや又そひのまふ色〳〵ふまきをけ拔ふそたり○常にかゞ父と祢をるハ
西去ふそふ醬色也○今檜物師ふるとのちに用る櫻皮ハ白かんゞれれとそふ是也死
單れ白色也夫木集ふ
みをのふる白かゞ櫻ちかく春れかさ移ふ狩死を咲桃死桑乗ふれ

不用白加波其色薄紅梅也とゝなるゝ櫻皮の色あひとりくゝなる成〜後鳥羽院
れ仰ゝ年齢のさゝ正義ゝなるゝ何ものゝ白樺なる〜と宣ふ八宿老の人八白
檀紙を用ゐ壯年れ人八紅梅檀紙を用ゐるとりく也本草ゝも為刀靶之類とゝ
今かゞまれとゝりを神宮式ゝ横刀ゝ櫻柄とゝるゝを是ゝや○貝原氏れ説ゝ
かゞ八甲冑ゝ多〜皮八及中れたひまつゝ〜又川猟ゝとゝも用ゐるくゝ
かゞとゝもゝゝ本草喬木類ゝ入〜樺らく今ゝ國史補ゝ以樺燭擁馬謂之城
とゝたゝ書畫れ紙をゝるくゝもゝる是ゝくゝもぶ〜本草ゝもゝゝとゝも
らかれゝ合也考之〜　五雜組ゝ樺皮易燃而无烟也とゝり
かゝら　日本紀ゝ河原又河邊とゝゝ又川上をとゝゝり史索隱ゝ蓋上者邊側之義
とゝたゝり○瓦をゝゝと皮れ義ゝ俗ゝ一説甲と今ゝゝと侈石波ゝ牧瓦をゝ八
ら牝瓦めゝらとゝゝ牡瓦八胴也牝瓦八胴也俯仰の体ゝ孔くゝゝ死瓦ゝゝぶゝゝら
疏瓦つみかゝらとゝを鎧鼓ゝ似ゝるをりく也磚八ゝ死ゝゝ也鴟吻八れゝゝら
也○欹ゝをゝれかゝらとゝみたるゝ屋上れ瓦ゝく鴛鴦とゝるゝ魏文帝れ故
事ゝゝゝり○かゝらゝ生るゝ松とゝゝるゝ八屋瓦上れ松也又苔れ類ゝ瓦松ゝゝり○

舩底をかゝらとゝふ八鋪のゝ也平家物語ゝふゝゝゝらみゝむ徐ゝれ舟とゝたゝり
○東國ゝ石瓦かく瓦とゝく屋瓦ゝふく布ゝゝり恠石供ゝ南雄産嫩石琢之可為金と
ふの類也○天工開物ゝ琉璃瓦ゝゝり皇家宮殿所用とゝゝゝ徐ゝ水瓦雲瓦とゝふ
唐畫とゝく如〜○獻をかゝらとゝるゝ拾集抜ゝとゝたゝり皮等れ義ゝるゝ〜
かゝる　変易をゝとゝるゝゝふ也かゝふゝとゝゝ更代交替とゝゝも義同〜萬葉集
ゝかゝらゝふゝらとゝゆらゝふゝる也○判官代主典代ゝるとゝゝかゝり也院ゝ官ゝゝゝ
代とゝゝとも
かゝ八　萬葉集ゝ交字をゝゝゝ公をかゝ八ゝゝひかゝ八ゝゝと是也ゝ字ゝ伊勢物語ゝ八
通をゝゝゝ実八ゝゝとゝ代也ゝゝかとゝ通ゝ
かゝ八せ　交易の意漢書ゝゝふ飛錢是也とゝゝ或八替錢とゝゝ○日本紀ゝ白鷺鷺
岳千谷上濱周部置川瀬舍人とゝゝゝ八魚代字ゝゝ人也
かゞ弥　神代紀ゝ尸をゝゝり皮骨れ義也顯宗紀ゝ骨字とゝゝり柩をゝゝゝ八
義剖也骸を同〜○神代紀ゝ姓又姓氏をゝゝ八尸ゝゝゝ出ゝゝゝ同也續日本紀
ゝ根可婆弥とゝひ姓氏ゝ縁ゝ人民れ氏骨とゝゝゝ是也さゝゝと姓氏れ外ゝ日本ゝ

く八別ホ戸とあるやうなりと於りハ家也之を八姓氏の波治ゑ一西云と同一又姓
氏の別なりしと姓と氏と混せり漢高祖と姓劉氏とふ如き是也
かハや　厠又溷又圊とあり側舍の義とあり又川屋の義也古事記ホ為人便之溝流下
とあるを豆ハ屋を川出ホ造るく糞穢を流せりとく糞集ニハ川隅ともあり說文
ホも高岸交水曰厠と云へり俗ホかやとふもかハやの轉也紀の高野山に厠
を制れ如くかき八高野乃義とふハ非也○今俗除夜ホ厠ホ燈を明しく神を祭る
異聞惣錄ホふ貶盧耗の凡俗ホく厠鬼を汙もまり紀為ゑ俗田雜譬喻經ホ
云へり今れ禄利ニ鳥翁瑟麼を國ホ祀ゑ甚誤也ゑゑ也紫姑神を祀く厠
神とも名ハ朱子於類ホ論ゑとあり
かハゑ　俗名独ニ水谷とあり川策れ義ゑゑ紀記式ホもゑゑ苻の
名とすた今糸れかハゑゑさも是をふゑゑ殿ニ無藻をかき或ハ彫ハ火を防く也
かくづ　日本紀ホ蝦蟇をよめり禹粟集ホ河津と云居処をりく多紙得ゑ也
易井卦に勦をかハつとあり豊後詞ホうでゑとあり○かハづの軍れゑ積
日ホ紀ホの巳寛喜保延のゑハ百練抄古今著聞ニ云し豊前規矩郡ホ年毎ニ



ゑゑと扶桑恠談ホ云ゑ遠州の天龍ニハ毎年れ彼岸中日ホ出ゑゑ慶長十九年八月
冬陣ホも津國曹山の色ホ出ゑゑ漢武元鼎五年ホゑゑ事文類聚ホのも
ゑゑ人ゑも九まくゑゑゑゑ一縉紳れ狂奇ホ
ものゑゑゑゑくさむ奇ゑゑみれかゑゑハそゑゑさゑゑ○鳴ニ時ゑゑく
夜行撃柝代更籌曰蝦蟇更と事物紀原ホ云へり○ゑゑかゑゑハ隱岐海部郡
の葛田八後多羽院の御製ニ有り江戸ホ石河傳通院上ホ新田大光院ホ羽國高
伝永泉寺高野山霊山院等勢を扛ゑゑゑゑ池ニ投ニ或ハ大后乃有代喻ニく鳴代止ゑゑ云へり○古歌ホ
苗代ホかゑゑれゑゑゑ鳴田ニハ水ゑそまゑれゑゑハゑゑ稊と云ゑゑれ郷談ゑ
ゑゑ一今も多ゑゑゑゑく八蛙多く集り鳴をもゑく大乳代トせり○色をゑゑ
時ニ喚脹腹ゑゑを倍ホ炊代ゑとゑゑ古歌ゑもゑゑり宇の部ホ出せり○百練鈔
ニ賀茂ニ社及海松立池蝦蟇與蛇鬪殺蛇ゑゑ○新千載集ホ
苗代ホの広移代蒔作ゑく
住近乳堂蛙呼ニ日とゑゑ同日れ談也○河津荘ハ伊豆國也姓ニもいり

かをるみ　日本紀に游泳をよみ靈異記に澡浴をよめり拾遺集の何出に女の川水
にゆみなるをとゝり
かただち　俗に水練なる者成べし川辺に成山辺とゝふに同し○議に
川たちハ川くまなるとゝふハ淮南子に善游者溺善騎者墮とゝたり
かもかり　神代紀に川雁とゝゆ疏に鳧雁之属とゝり葦田鶴とゝるが如く
唯鴈をゝるゝ○川鵜ハ後世れ泛るゝ也○川渡ちらハ可ちり
かハゆ　徒然草に之ゆとゝ了内府通親記ゝ之ゆとゝ了ゆくゝ之ゆとゝ了ゆ意に成べし或説に可愛の稱訛せる也とい
かハやゝろ　顕昭説に神樂譜に夏神樂とゝふ多り川の上に榊を立て榊をき
くまるる也奥義抄に云の行を榊に掛くれは神供を奉るとゝり新古今集
に夏神樂のうたをよみ之りけるを貫之
川社　之のに社りを之ゆを衣ゝふるゝ也ハ七日ひさゝん七日ハ神樂の日數なるゝ○れ
かよを川瀬に於る社ハかとゝり川社とゝ了ゝ多くハ後の神を祭れり社なくて
も假に神を祭りて神樂をもるゝ也ゝ江都督れ河陽從入道重義故



かとに小ハ直に夏越の神樂をよめり俊成卿れ川波のたゝりて唐の鼓れ音のやうに
聞ゆるを也に小神樂に引くゝ也と説るも後に之なくなるゝ故○諸社百首に
五月女ハ出波さゝふ木松川かをやゝろと八是ゝをなり等
かをとゝ　顕昭説に あをゝ也ゝ之ゝふハ泡ゝ也ゝ
とゝに同し後撰に かハとゝゝもとゝるゝも同意也とゝり芦に河に寄くよめり
〈かひ　日本紀に牙字をよめり芽に同し甲の音狎とゝり日本紀の鹿鹿史をた
事記に荒甲に作とゝり字書に甲八草木初生の芽なる也とゝたり又ひと濁り
くもゝり古事記に阿斯詞備とゝゆ頴字をよむ義同し○かひなるかひなき
の例も芽より出るなゝし註の字れ意也とゝり或ハ益をよめり新千載集に
海原や浪に乱るゝ草牙れかひなる國とゝるかこさ○倍の呂波に
弱るゝをかひなしとゝふも此類也○卵をかひとゝむ日本紀に之ゝたる牙
と義通ゝり結を条に落のひことゝり倭名抄に之ゆ卵を也かひなるとゝふハ
卵割の義也茅の苗に成ひゝるとゝふも同義也○殼をよむ倭名抄に之ゆ卵
に同し出の皮甲也と注せり○倭に穀をもゝり参遠に くハかひらとゝふハ

助字殼の義也○新撰字鏡に蛻をあり字に得たり〜靈異記に節をかひきとよ
めるも同し○貝とよむも殼に同し貝はと一物の名なるに式邦に甲介乃
類をもて貝とつくり○源氏にかひつものともゑ貝は物也とゑと倭姫世記に
貝滿物とゑたるも正義なるべし○智度論に如
貝用氣甚出其音甚大とゑるは法螺を指る也○故客の吟情とよを遊ま
弄翫に備へるもの多く海畔に多きもの空殼也それを中ふうつせ貝みるし
貝ゑそれ貝かさ〜貝るとは後く称せり妹貝袖貝背貝見るとは意趣をうく
名なり紀貝楊貝梅紀貝千種貝撫子貝猪穂貝るとは形色の似たるをとそ
名とせる也○貝は海物にて貝名に出ものなり〜種〜貝殼に出に滿た
るもの野那須のつくりよるとつくり伊勢の渚出にまくらり○貝とよるは飯貝の類
也貝の形に似たる也支我邦にも竹節とも小用うとゑ枕草紙に〜かひ乃
ゑりまきくるりたるとつくり字節會は堂盤小必も匕節を具ふ或いくゑ禮三
金銅の匕節を用う漢家の儀に准らふるべし○新撰字鏡に鉄をあるは式義
小や又鮡を藥のかひとよるり○柄をよむも殼に同し柄も殼もからとよるり



○椴を日本紀にかひとあり系統つるれ殼とふあや今はひとのくつり○此の
かひは倭名抄に峽とあり間れ義也日本紀に名字をよむも同し○熊谷榛谷
るとは訓を用う○國の甲斐も峽の義也○甲斐川は伊勢備前にあり甲斐庄をも
楠氏橘姓也とつくり○支養猪飼るとは今はかふとふ是也日本紀に井字をよめり井
餌の義也かいのぐりかいつるは鶏川にふる辞也○かひをつくるとは貝殼造る
ふく音をふるやう青物絵に顔を彩色るくく貝殼つくく造るとゑ
かひ 鐵とつくり倭名抄に八結をかぶと割せり食に生白也とゑ梵語の迦毘羅
也とつくり○源氏にみとふ虫のもてみふ多くふるかたるかひをとゑ
たり○萬葉集に山田りるとの虫かひの下とれのことあるは蚊也とつくり蚊
遣火をふ也かひたつるかひのけりるとふも同し
かひこ 倭名抄に卵をとつくり又蠶をふ養兒の義なるべし又蠶は卵生をれは
卵子れ義なり奇にかふことをもとつくり萬葉集に養蠶とゑ古事記に奴理能美
之所養虫一度爲蛹虫一度爲蛾一度爲蜚有變之色之奇虫とゑるも蚕を指り
姓氏録に百濟國人努理使主とゑ之神代よりこかひの術はいまと韓國にと

なるへし哉へし○吉利といふは殭蚕也原蠶はなつご也蚕紙はたねつみ也○委と養ふ乱のつゐく損もあるなり但馬養父郡又神社あり縮さく小石氏請ひまつり棚にかけ玉は繭に來とそり○金蚕の子五色線々出て石中蠐螬也とそり

かびや　萬葉集に鹿火屋かもに鳴かもつとよめり香火屋とも書り鹿火屋を本義とすへし山里の鹿を追ふとて假屋を造りて火を防き臭き物をもゆるをふ今はちひさき屋を造りて其内に燵をともし盃とそり紀の熊野れるとよみはなとかひとふともそ○谷澤氏說に信濃國にはかへ盃と称するもの農家に名なり片や称かく藁ぶき也蘿蔔蕪菁なとを蓄へおりこしも鹿火屋れ轉訛なるへしといへり○枕詞に朝霞とあるは意はかをるといひかけたるなりといへり

かひな　神代紀に肩をよみ靈異記に臂をよめりなりかひなといふは胛也○周防の内侍かかひなくたゝんとよめるは胛よせたりし小式部か大江山れ歌道綱乃母れいふに之しれれ詠伊勢か輔か九重とよみ清少納言かよめるもそれ称とえなる皆女なく時につどんくれ秀逸百人一首の撰にも入て斉く妙に感にたへれ

かひたて　延喜式に貝鮹鮨あり日本紀に貝鮹皇女と見えたるも此に据まつか

なるへし章魚は貝かなるをかくす貝よりて海上に浮て殻をたてあゆとよそり

かひろく　倭名鈔に舩をよめり舩不安也と注せりかへひろくの義かや○枕草紙に傳のやせ衣ほにかひろれなくなる人にもみえり似そゞれとなるも同義なりや

△かふ　易をよめりかふるともかへるともいふへるとなるともいふ也よく万葉に巻に易とかひともよめり○貫をよむも換ふの義也西仏のかみも貫を易とも云せり東鑑に博をよめるも意同し○靈異記に債をもつてかひとよめり物のかり也○盤をかふるといふは文字なへし○畜養をかふといふもかひやしなふ也靈異記に餧をよみ常に飼をよめり○手背をてのかふといひ足跗を足のかふといふは甲の義なりや說文に叉を手足甲と見えたるは爪甲をいふ也

かぶ　日本紀に頭をよめり古事記の訓にかぶつくまひとよめり頭衝直舞也○株といふは南方草木状にありかぶ状斬株とそり科をもよめり又探字を用ふる人は蘭よそり作にかぶたといふは株立れ義也國によりかぶちともそり神代紀に木株をこのりてよめるを中臣祓にはこのたちと見える是也○竹のさりかぶは鬼歯

也○家ホもとゝ分もふハ本より出たる也荷負の音とふハゝ

かゝち　河内とよみてうゝふ也カとハ河内とふホ名けハ又河西北ヨ五とし
くゝく皇都の又称ホなりしよりてゝ今かゝちとふ○禹巢集ホハ川の行廻き
る玉成ゝてゝと村里の名ホ呼ちの是也龍津河内ハ古野也

かぶろ　童ヵ先髫とふ髪振の義なるゝ○頭或ハ山ホ童とふと童部れ如
く寇せきる意也倭名抄ホ先を剖せり字書ホ先無髪也ともゝゝなり○平
相國清盛の時ニ百人の禿なり足軽の如し平家亡ひく後源義経の召使と
きしゝ中ゝゝなり○ゝ髪をゝ子ゝと義同し○日本紀ホ岐嶷とよるゝハ義を
りく訓せるもの也○出雲國造神賀詞ホ加夫呂伎熊野大神とゝ風土記ホ
熊野加武呂乃命とゝなり○かぶろ坂ハ高野山ホなり今ハ学文路とかゝり

かぶと　兜鍪とふ盔も同し首鎧也頭ホかぶるもの也ハ名とゝ世ホ甲を訓
もるハ誤也冑也伽も冑ホ同し新撰字鏡ニハ鑪を鉀とよみかぶとまハ幾
列とふ庭訓ホゝ○舞の装束ホ別様甲ゝ種合香のトニハ別様甲但種
合享之形とゝせり貴徳の舞ホ鳳凰甲なり○冑れるもりハりと引立烏帽

子ハ陣中の冑ホ冑と抜くゝ将の前ホ巻るホハ折たみ巻る烏帽子を引立たる
其を制る後ゝ○伊勢鈴鹿郡加ヵ毛ホ平重盛次男資盛居住を是故なりて
重盛命しく資盛を勢岳せし所也○冑ハ摂津ホなり

かぶし　神代紀ヨ頤頌をよみ従然草に女のゝをゝかぶしゝるもるとい
とよゝとゝくと云天智紀ヨハ金鎖をよみ奇ホハ採たるハかりかぶしたるゝ
なゝしこれ編かぶしともけんともよみ傾仗の義なるゝ

かぶつち　日本紀ホ頭槌とよみ剱の名也奇に加ふづちとまとよみつ
ちハ槌也つゝ又ち也今ニ和ニ編山れたりに石の剱頭槌の如き義なまくゝ中
ホ堀得たるを紀るホ義ハ石ホ義ハ完とたりく甚古雅の器也

かぶとゝび　西土のもホ甲首とゝ冑甲を加ふてもゝハ代ヨ拵く謬るゝ

かゝ　日本紀ホ柏とよみ香重れ義なるゝ倭名抄同し今加とゝなる
物なし松柏とゝ称をるホよれハ今世側柏扁柏圓柏混柏仙柏の類を
ゝゝ又ゝ○倭名抄ホ椹ゝをとよみ奇ホを加とよみ今かやと
ゝハ結也数やれ義ヨハゝりし柏實とゝなり○日本紀延喜式ホ

ふ小柏とかしひくらよめハ柏小數種ありと知へし○かへの社貫之集よみえたり

かへるて 又同前則還とよむハ換易と義同し他よふハかへるも也靈異記小覆とよめりつく
さ班師とよみたり名をかへるハ日次記よみゆと東見記小あり羅淳
子の後小崇徳帝の時撰ばれし詞花集を難しく詞花の二字邪よ反るとて
しるしゆれく自己れ方よくはらてるきろよく用ゆさ他小對しくふハさそ
せろあく用ゆ名り○倭名鈔小卯の名るハ鴫とふ鷹の名るハ鵤也二歳とふる
とふ蠶の名るハ蛈也皆かゝる意也○蝦蟇とふハ遐ゝ小棄とてとをあさ所
よ慕ふく還るとのゑさ名とれ蝦蟇れ文字を遐慕の意也とそり新撰字
鏡よハかひるとみえたり和蘭(ヲランダ)語小きてかゑるをとふ○蛙をかゑるハ蛤子也住所
よよりく色異なり草むら小住ハ色青しかよかへる也黄土よ住ものハ色黄小
みゆなりかゑる也朽木のうつろ家居のかとろよ住ものハ黒点を生しかなりほ
たふ似よりかゑる也かゑるとハ蝌斗也催馬樂よ力なれかゑるとみゆ蛇よのまる
常かく又蛇を食ふあり田父とみゆ又三足なるものあり共ふ本邦小もまた
あり○加賀國かく野中の大石线割たる小石中小水を畜へ蝦蟇あり蟇乃

如し○倭名鈔小越前國鹿蒜(カヘル)とかへるとよめり所小かへる山とふ是也式小敦賀郡
鹿蒜神社とみゆ日本武尊れ故事小よりしなる号なるへし○淮南子よ蝦蟇為鶉と
みゆ我邦かくハ未聞の事也○海かゑるなり

かへで 萬葉集れ蝦手とかくかへるでとよめり倭名鈔よハ雞冠木かへるでれさ
雞頭樹かひるでのことよみてく一木の名也とみえたり蝦手も雞頭も葉れ形状をもて
名るる也今楓を訓もるハあやまりされど朝鮮國の学士李重叔か稲若水小答へしハ彼國
れ楓樹と相同しとみえたり 延享れ韓醫活菴か直海氏小答へしとも示然り楓譜小
今世愛楓者多以雄楓為貴種類五十有一とみゆされハ近時西土より傳へかくも
みぢと称するハ三尖れ品ハ雄楓本邦の五尖六七尖れものハ雌楓なるべしとそり○享保
中れ傳へし楓樹ハ御園及日光両三株よゐれ其餘絶へるしとそり今唐かへでと
称するも示真の楓樹小非ずとぞ松前あくハいたやとふ葉大きしとてハ今秋
至と称するもの此小据也蝦夷かくたもそとそり○徒然草小卯月ばかりれ若かへ
でくすべて花もみぢなどよもまさりくめでたき物也とそり夜の色小うんあ
とふふしまさそけかえたり○大かへでくあり小かへでくあり常れ葉ハ五岐小て

セツ ぶるとは ろ其色の変ずるを云ふ ○ぶるとハ華く ねぶ べし ○ぶるとハ
かぶくのやうに揉ぶるをいふ ○ぶるとハ反葉かぐとあるものも別種あり山ゑでと呼
ちあるを用ふ 株青し

かーしらさ 日本紀ふ報歌又和唱とあり歌の変也萬葉集ふも和歌とあ
り又歌とあるハ短歌ふく長歌の意と分ちく其義を又復下軍ぞるの
意也又唐書の類ふも歌を取直しなるを平記ふも歌を翻案をとなり

かーんぜを 日本紀ふ不肯をぜとあり ○ふうけがうぬ義也塩裏抜ふ肯をか
んぜとあり可也と注をなくくとあバおかの横音を通ハしなる詩ふ見し
肯の唐音ふんとなりしと訛く和訓てぜしんとあるハ却く謬也

かーらなぶ 選饗の義なり ○ふ近衛之將管鎮ふくるを行りて後夏方より食
と給ふ也とあり還立の饗とあり年中行事歌合ふ
持ち射れ司を引つまく かーらなぶしを乳色とあるふ

かーりあらし 源氏ふ之ゆ賽をとあり報案の義也年中行事歌合月次案
菱のそれ年れとあるふ月ことのかーりまうしれ神のみくらち ○復奏を



かーりまうしとひしるを玉乗集ふ之とあり
かーくひまりを 源氏ふ之ゆ復奏の義也さひ又一也 ○同ふ加さうしきとあるを
ハ可復也とあり

△かか 日本紀ふ顔面又容貌をとあり形秀の義なるを一一垂仁紀ふ色とあり
説文ふ顔氣也と注せる意也 ○俗ふ顔ふ似ぬ云とふハ人面獸心なるとふが如し
○神代紀ふ垢をとあり又逆ふ垢俗とあるが如し 菅家萬葉集ふみをとあ
がかたち集ふやどる月をぬるかがるる西行がかたちなるを俗ふ我なるぶ
とあるを西行のをふ何くの貌とあるを意也
かかたせ 顔をとあり音便ふくかんをとあり遊仙窟倭名鈔ふ面ふをとあ
るを色ハ意とぶを也とあり

△かさ 鍾とあるかまぐるの意ふや古事記ふ鍾を義訓ぜり豊後辞ふかりとあり ○
近江湖水の魚ふ呼を形鍾ふ似ぐり 鮒の品也 ○釜をあハ今の鞆鞨語を同一倭
名抄ふハかまと訓せり ○一統志ふ覧飛亭在天台縣宋淳熙中日本沈門栄西
建内有釜極深廣とあり ○新撰字鏡ふ甌をとあり又鍑を小釜と訓ぜり

○釜鳴こと拾芥抄ふ之たり楚辞ふ之く西山ふと厭勝の術たり備中
吉備津宮の釜八祈願たりく祝詞伝とふまと八大小鳴く山川震動もとそう○
郭巨ふ釜と釜と得ふ量名ふく釜八六斗四升也とそう○日本紀倭名抄小竈
とあり今ふと塩竈焼き瓦と焼くの竈をかまとふ也○蒲八倭ふ名抄ふ濁ふ日
本紀ふ八菅ふとあり九かは也とそう倭名抄小蒲黄とかはのきると訓せり
○蒲冠者八遠加蒲生の御厨ふく生生たりしの名とつ八かまるは是きとかも
と唱まれり○伊勢内宮の摂社ふ鴨社たり其處伝俗ふかはの谷といふ
かまど　竈所ふ義必〳〵儀式帳ふ竈ふとそく後人釜をかまどつひ竈をかま
どとふ也釋日本紀ふ梵語とそふ八ふ得かさし○うつぼの名所ふをそう○かは
と将軍とふ説八長安の説ふ竈下養中郎将ふ出とそう○かまど山八紀伊名草
郡ふたりかまどの関八安藝也筑前御笠郡竈門山王依姫をあるふ大江匡房
春八りと秋八こがるこかはどと霧と煙とそふる太平記まふ寶満ふ嶽
かはち　字彙小槌狀頭横木とそふたりとかまちたりがまちるどそう或八
擋とあり○左傳ふく頰とかまちとふ文集ふく輔車とふみ常に頰とそう



こと説かまちとふと壜裏抄ふそたり今ふかまちとふ頰縁ふ也ハまと通ず
かまけ　蒲筍の義也今ふ藁とかく造まり西國ふく八かまけとふ菰草ふく造る
とそう○感とあるふ八日本紀霊異記ふとふそたり今俗ふにおかりと名ふとか
まけくるとふ意近〳〵出羽ふく肘を伏ぶとふ説かまけるとそう勇集に
たりかまけとふ八喧けりの義ふ也〳〵
かまも　日本紀ふ畏とあり蒲簀の義也ぞつとそう蒲筍ふ同〳〵○魚ふふ八校
魚也とそう校の形ふ似たる也下学集ふ鮒と〳〵鄭字と〳〵得ふさし
又かまもご八苗也播州勢州みくいるごとふ海濱ふ假屋を造り釜とふとく
煎〳〵油ととる其八滓とふとくく釜滓を畧〳〵くかまとふふや
かまふ　搆とあり搆とふ及ふ也○桟敷ふかまふるとふ八徒然草に
そそ居宅ふかまくとふ也源氏とそたり結搆の義也○姓ふ蒲生とあり近江
の郡誌史○蒲生野八う祢の小同〳〵○新撰字鏡ふ椹とあり大の色也と注せり又
椹のかまふるとふ凱とあるまふ及む也字書ふ凱開口見歯貌とそたり○かまへて
何くとふ河八後を鑒るく不詞也

かまぼこ　蒲の花を云ふ蒲鉾の義也本草に花抱梗端如武士捧杵故俚俗謂之蒲槌といへり○魚糕を云ふは形色の蒲鉾に似たる也近世の製は多く西土の古にもあるを又双紙にかまぼこなりといへり今多く板を用ゆ本式は魚肉を鎗にて竹串に貫きたる物也といへり

かまかぜ　奥州信濃越後の地方につぢ風の如く人をつまずく人を損傷する鎌風と名くその吹ふ厳寒の時にあり陰毒の風也西土にいふ鬼弾の類也といへ

かまびすし　讙譟諠咶とよめりかまびすくひそかし紀意なる也○四国の俗は囲究の意にいへり

△かみ　神は瞰見の義神明照臨ましますをよめりといへり又赫見の義鏡出来ざる前に日月の光を天鏡尊と申奉るより史記の注に鬼之霊者曰神ともしるしたり○天皇を神と申奉る事は宣命古歌にも多くみえ日本紀にも明神御宇と云し古事記雄略天皇の哥にも自ら神とよみ万葉集に皇者神尓之坐者とよめり○雷を雄略紀にかみとよめり日本紀万葉集の哥多く侍り今もかみなりといへり○雷火にて家などやけたるに薪火を投入るなるは埋雅に



龍火以人火逐之即息とみえたるに火たけたる也されど燔焼するには立つくは雷龍人火の□かちあるし謬くくを場ひ薬を投せしより替神録にみえたり○雷書の事も西土にも諸書にみえたり○上をよむも神と義同じ或は浮この上略ともいへり○髪も上に在の毛也徒然草に女は髪のめでたからんとあり吉野拾遺に興福寺宝蔵の光明皇后の髪長一丈あまりいやかなる色翡翠とかざむくといひ吉野天の川の弁天に義経の妾静が髪あり長さ八尺とみえたり又なる家の婢夜中に閨に入て梳る度ごとに髪中より火焔たちくと落る後に富家の妻となりて子孫さかえぬ代酔編に王嘉甫が家をとどけは常に火星まろひ出頭を梳りし八髪賢の中より晶蛍流落を是貴徴に非ず是は寿徴也とみえたるとも同じと醍醐随筆にみえり宝暦の初め信濃の某が妻髪を梳るに玉のちらちらと落るが如きを見たりしは吉沢氏の手間にみえり○四等の長官をかみと称するも其官の上に立の者也○僧の辞に師を称しくかみとつひしを古今著聞集にみえたり○士人の妻をかみと呼も義同じ戦国の課役箇条にかみの料として婦人娶るにその料となれるありき今田舎におかさ伎と呼もおかみの略敬し美濃には姿子をよろ

○紙は丸見の義なるべし本朝にて紙を造る始は推古紀に見えたり色紙檀紙穀
紙屋紙河苔紙斐紙薄紙等の名なるを倭名抄に見えたり麻紙朝野群載に見ゆ秘
邦の紙を異朝に称せしはまた見えたり唐玄宗の時に多く書を集め日本国の紙
にまじへしを松窓雑録に見ゆ○紙は箋張とよめり唐式に見えたり舶来の内に作紙
藤紙は漢名也馬糞紙は草紙也○紙裏の字西土の書にも見ゆ○西洋紙は利諾
といふものの紙布として敝れは搗て紙となし極て堅韌とぞ○紙をくずをとも天工開物
に穀青とぞ○かむといへば号ふ詞まてかみといへば要なる也

かみろき　日本紀に神祖とよめり出雲国造神賀詞に加夫呂伎熊野大神仁明紀に加
夫呂伎安度呂伎とよめるも同義なるや神賀詞の奥に高天の神王高御魂命とあるを神
王とも亦同じく訓ぜし王は王父王母の称よりや出たらん○かむろきかみろぎと並べ云
ふは陽神陰神の称いざなぎいざなみの如しとぞ

かむかぜ　神風也神武紀の歌に見えたり伊勢の枕詞也風土記の説は心得ざる
し神風の風俗といふなるべし神代のむかしより天照大神のましますべきところとは
其風気の絶て他国より異なればなるや一説に神風の息とかけたるを伊勢の一諾に



いひかけたる也諸尊の気は風神となるも神代紀に見え万葉集にも神風に伊吹
惑はしとよめるも気吹の義也とぞ○神風の讃は伊勢篠嶋也神風は雀液詩に見ゆ

かみさび　かんさびともいへり神閑神宿などよめりさは助けの詞よく万葉集に神
左備とも神備ともしるせりさびはぶり也ぶりをびとよむかみさぶなどともいへり神くし
きをいふ也万葉集にはかく用ひたる多かり

かみなび　神奈備とありもと神宮の義なりて神を祭りし所といふ歌にし或神
のもりの義ともいへりみなふくみび常に通へりともいへりよく神なびと名けたる所
多し神賀詞にも大御和の神なび鴨の神なび飛鳥の神なびなどと見えたり○神
なびの御室は大和神なびの森は摂津神なび山は丹波又山城の山崎にも神なびの
森ありされと神なびのりとつゞけしは後世の事也

かみのこほり　今の姓氏に神三郡とあり云々多気度会飯野の三郡を神郡といへり
神郡は持統紀に見えたり神宮雑例集に皇太神御鎮坐之時磯部河以東神国定奉
飯野多気度相評也といへり三郡のうち一郡なりしをも大同本紀に見えたり又道
後三郡ともいへり後に代々に寄進して重ね安濃朝明飯高郡の御寄附ありて

神八郡とうまれハ伊勢人の姓なるべし○三百年ゝの干戈ハ神地もなく他ハ押領せられ渡會郡さ之半ハ他領となり剃豊臣閣の時ハ検地の催しえたりしかと要の若ふく止ぬるゝ陽復記衍義ハ之たり○延喜式ハ伊勢國飯野度會多氣安房國安房紀伊國名草下総國香取常陸國鹿嶋出雲國意宇筑前國宗形等郡為神郡とゝ之たり

かみれき　之諸礼ハ男女とも八之歳の霜月十五日と良辰とゝ之

かみたれ　髪垂の義兒の初生六百日ハ生髪を剃とゝ之又諸とりく祝せるゝ也實積経ハ悉達太子自持刀下髪とゝ之たり○兒生まゝく七日を経く剃胎毛髪のゝ竺土の風俗も同一諸ゝふゝ之ゆ

かみそき　源氏よゝ之ゆ髪を切の式如一源氏の奇ハ

もかりゝふさ千ひろのそこれゝみるゝふるのわひゆくまゝ伐ものゝとゝ之髪を切乃調度ハ海松と一ふさかるゝゆたり

かみたち　義満將軍の時内野合戦正月元日ハ殿中賀會の素襖の袖と裾とゝ成とゝくゝゆハ徒ゝより起りとゝ之礼の重さハ長上下と用ゝゝと是也



とゝ之今　[illegible]ハ伊ゝ之ゝ[illegible]や合戦八十二月晦日のゝゆ也或説ハ細川頼之よ

り始ゝるとゝ之其上下とゝふ辞ハ古事應神記ハ上下衣服と云くゝハ袍と裳と

と之ゝ之ゝ税詞式ハ也御衣彼上下備奉とゝ之たり今俗の了所ハ狩衣上下とゝふる

ゝ之たるゝ一永昌記ハ小舎人童狩衣蘇芳草と云せる也上和抱代ハさうとくかみゝを花び

たちとゝひ十訓抄ハ公義あゝ之の加みゝをとゝ之たりとゝ之著聞集ハ花のひゝを

上下にたゝがさゝるゝくとゝ之東鑑ハも直垂上下とゝ也御廐舎人武康著赤

色上下とゝ也ゝ之たり室町家の時ハ重坊のゝ著せ一織田家の前より武士の姿

かくゝ成りとゝ之後世社祢或ハ祢の字を遣りゝ也ゝ貴賤とゝ也ハ麻上下と礼

とゝ也ゝるハ古代ゝ之存せるゝゝ之一○鎧ひたれの類ハ又上下たり

かみるかち　日本紀ハ惟神又隨在天神とゝふ御製乃

所ハかみたちとゝふゝ也同一多くゝ天皇ハ奉ゝ之又直ハ神ハを奉るゝ

例一代一度大神宮の宣命ハを奉ゝ之ゆ○万葉ゝ神長柄と尺ゝ

かみたち一　詩ハ神保是饗傳ハ楚辞所謂靈保ハ以巫降神之称とゝ之たり

○神小神なり一の句とつゞハ初五文字なり
かむなびより　萬葉集ニ神かんつまりとゝつまりハ此ノ名也續日本紀ニ神積と
又祝詞式ニ神留とあり是ハかみとゝ留とあむハ留ル集とつまりとゝ留
ハ留ルと略せるなと有ぬ一祝詞式ニハ神集をかんつどとよみ萬葉集ニハ
かんあつめとあり
かみなつき　十月とゝつ十八數の極なるゆゑハ數皆月の義とゝ神嘗月の義なるゆゑ
我邦の京ゝを西出ゝと神嘗条八十月なるゆゑ其證多し古説ニ神無月の義
とし出雲の故事をとひ從り新續古今集ニ
逢ふことゝ成何ニつゝん神無月なりもしくとゝろれぬるゆゑ
萬神と帥ひくゝよのなりなるハ八月也と出雲国造家の説也或ハ雷無月の義
なりとあり
かみのをゝし　神之使とゝなるゆゑハ日本紀古事記ニ出たるゆゑハ據なき俗説のゝふたく
そをそれの中ニ猪を伊勢大神之使とゝなるとゝ齊明紀ニ之八幡の旌ハもとゝとゝ
と音通一春日の鹿ハ鹿嶋より加せたるゆゑ一奇なり稲荷の狐



ハ御鉏津神と云狐神と記せ一にあり熊野の烏ハ神武天皇ハ咫烏の導を得たるゆゑ
四氣比の鷺ハ仲哀天皇白鳥と愛し給ふゆゑ俱ニ紀ニ見たり杜尾の亀ハ亀尾山乃
号にて一説日吉の猿ハ八月行幸の社猿田彦大神なるゆゑ記ニ見ゆ一一ハ外ニ愛宕社
猪ハ宗像氏の人再興せ一により云嶋の鰐なるとの類挙て数へがたし又鼠を大国の
使とゝハ二説ありて大巳貴命おゝくゝハ古事記ニ鼠の故事ゝ見たり大黒天おゝくゝハ
聖寶藏神經ニ左手持鼠囊とゝ見たり
かみよりつさ　萬葉集ニ神依板とゝ見るゆゑ板とゝ神南備とゝ見たるハ三輪の神也其ゝ
ゝ見て板の板と云ふ也ゝ○内裏ゝて今ゝ琴の板てふ物ハ神を降ゝ
神の表とゝ見る事ゝ俊式祝詞ニ遷宮儀の遷ゝ事ゝ昔ゝ板とゝ
かみなりれたる　倭名抄ニ襲芳舎ニ以霹靂俗謂之雷鳴壺とゝ見たり物ニかんなり
たるとゝ見たるかんなりの陣とゝ見たるゆゑ事根源ニ首雷の声ゝ高く鳴られ
大将ニ下近衛の次将おくゝ弓箭を帯一く御殿の孫庇ニ使一く御門を守護一奉
ゝ一也とゝ見たり
△かむ　神代紀ニ唱嚼とあり霊異記ニ噛とあり新撰字鏡ニ齧又齬とあり又離

又醋とよぶかびとあり○腹のかびるを出つるむるとふと嚙とをたらけるを問ふ
へ○酒をかびハ醸をよみ新撰字鏡ふさけかびとよめり殆ちく粉たるを語也と
ゝり宣貿の説よハ文ハ吸咀〳〵く酒と造るとゝり土隅風土記ふ口嚼酒とゝるをみた
るを也武備志ふ琉球のくふふ婦人嚼米為酒とゝるを讀とをゝ○涿をかびとゝふ
も嚙ゝ如くをゝる意也

かん　神字とふたるハ多くかんとよむ例也神代紀の神号ゝゝ〳〵神武紀ふも所
ふかんかぜとゝるを也後ゝり○酒をかんをるとゝふハ温むるをいふかをゝるふ同一
或ハ閒字を用ふハ白氏文集ふ林閒煖酒燒紅葉とゝるふ据ふ○物をかん
ゝるを時ふふハ勘字也勘辯勘定ふとゝり○筭ゝかんのたゝとゝふハ文字也短文
抄ふとゝゆ○馬ふかんのつゝるゝとゝふハ駻字也○壺ふかんとゝふハ甲の猛音也○食物
ふかんとゝふハ羹字也ゝかんハ羊かん温かん鰲かん也又猶羹鮮羹鹽羹筆羊羹
海兎羹ゝ金羹月鼠羹ゝ等たり又さゝかんとゝふをゝたり
かんる　假字也源氏ふかんるのゝるん今の世ハをゝきふるくゝふたるとゝたり
○鐵の俗称ふをゝり



かんべ　神戸ハ日本紀ふ又戸令ふ〳〵神社ふ租稅を奉るを農民をゝり○伊勢河
曲郡安濃郡ふ神戸たり尾張中嶋郡ふ本神戸新神戸たり童謡ふ伊勢の神ハ
新神戸尾張の神戸ハ本神戸とうたふ神明の大社たりく真燒の大甕七ツ存在を
参河遠江ふも本神戸新神戸たるを神鳳抄ふ又伊賀國伊賀郡ふも神戸
たりく御遷座の跡ふ神庭神明宮たり朝野群載御厨御トの條ふも出たり又忌
神戸預安濃神戸預河曲神戸たり預とも又ゆ

かんなめ　神嘗の義九月の祭也文平記ふかんなめまつり伊織部祭とあるハ神衣より
義訓せるを〳〵〳〵今義解ふ神衣祭日即使祭之とゝゆ

かんなぎ　倭名抄ふ巫を訓せり神和の義也神意をなごむる意也顔會ふ巫祝也
女能事元形以舞降神也とゝたり職人所合ふも女を圖せり又かふなぎとゝり
新撰字鏡ふ魅をかんなぎと訓せるハ〳〵〳〵○又みことも称を其称の中ふ神
を降〳〵ふをもを一流たり倭名抄ふ巫覡遊女をゝ〳〵乞盜類ふ入たり庭訓往来ふ
も縣神ふ傾城とゝたり西山ふも巫娼の称たり今も信州諏訪のたりみく
巫女と称をるハ神ふかく別ふ神家を離るたり縣神ふたり娼を兼たり鎌倉右

之臣集ふふ里みを破石集ふふ[illegible]紀みを也國朝詩評ふ村巫とえたり○延喜式
ふ九御巫御門巫生嶋巫各一人又座摩巫(サクスリ)たり○祝詞ふ巫をかんことるむ神ふの義く
かんさふ　神代紀ふ神退又神避又化去又終字をよめり神去の義也人ハ神をりく生
ふゆふふさえり又かんハ前ふいへることるふ預て去の字とよめり
かんだてさ　日本紀倭名抄ふ綺を[illegible]り紙機の義ふ[illegible]仮錦而薄者也と注せり○
江州の地名ふもより綺宮景行紀ふ[illegible]
かんだち　倭名鈔ふ麹と訓せり醅(カビタチ)發の義ふ俗ふ[illegible]ふハ代詞の略也ひめ
かぢハ女麹ふふかぢハ黄菜也又白かぢたり醅(カビ)ハ俗ふ[illegible]ふハ[illegible]
俗ふ竹黄もより糀ハ倭俗の製字也蝦夷嶋の俗ハ今もかんたちとふより北海隨
筆ふ[illegible]○ひゝ伊勢三麹とふハ[illegible]村河曲郡玉垣村飯野郡中方村ふ[illegible]
かんどれ　日本紀ふ霹靂とよめり霊異記ふかみどれ萬葉集倭名抄ふハかみ
とけともえたり神解の義也とくハ解裂の意神代紀ふ裂雷とふ是也延喜式
ふ霹靂神祭たり三座坐山城国愛宕郡神樂岡西北とえり○新撰字鏡ふ靂を
雷のふるふ本とより○かゝかつゝも訓を雷ふり



かんのくら　熊野新宮近き処ふたり高倉下命と号ふとより續古今集ふ
三熊野の神くらふの名たゝみのりとくもれ祈ふる石たゝみハ神武紀ふ
ふ天磐盾ふふ
かんやどり　弘安禮節ふ神宿とより申ふ頭上と謂と注せり今世ふハ幡座也と
より又四天の星とよめるも厩戸皇子四天王像を造ふ頂の髪ふ置く敵ふ
勝たまひゝふ記ふとより
かんかゝり　神代紀ふ顕神明之憑談とよみ天武紀ふ着神をかゝりとよみ古事
記ふ為神懸ふ作ふ神のかゝりたまふ也後世託宣とふ是也神誌とえたる代義
ふふゝ顕ハ古事記ふ大物主神顕(アラハシテ)於御夢曰とふる意ふふゝ仲哀紀の歸神を
訓もえゝ
かんだちめ　かんだちめとも又ゆえ上等部の義多く上達部とより官ハ宰相位ハ三位
以上をより又月卿と称も唐詩ふ月卿臨幕府とえたり○神館とも[illegible]り新
拾遺集ふ上西門院ろきとき[illegible]
たまひ[illegible]りけふふとえたり

かんみかど　古事記ニ神朝庭をよめり萬葉集ニ大神宮ノ齋王の奉仕をさまをと
ハ宮ばらともよめり内宮といふ名ハ是ゆゑ出たりとぞ
かんのわんぞ　物ニ肖の郷長とゝゆゑ太上天皇のめさせらるゝ小宣旨をつかとそり
かんむりごと　倭名抄ニ冠箱とゝ笈ニ似たるゆゑ字ハ儀禮士冠礼の注
ニ出たり

〈かめ　亀とゝ神と義通ず日本紀ニ亀石郡とゝ倭名抄ニ神石郡とゝ
せり神代ハ鹿下ゆく後世ハ亀卜をたつとめり倭名抄ニ神亀とよみ甲を神
屋ゝとゝり○嘉祥元年ニ豊後ゝより白亀を献せり○亀泉をかくゝ石文
字をあらく滅せめとハ草木子ニゝたり○公羽國男鹿嶋の濱ゝ大亀を
網ー殺さんとせーを一老翁行かり亀を賞く海ニ放つ其夜夢ニゝ中石
村とゝふ所の礒ニ浪ゆく銭をお上砂ニ埋かれり拾ひ求むーとゝ次の夢をまさ
かく告たり老翁行く拾ふ数百貫ニ及ず皆元豊通宝也とゝ毛實ゝゝ虚
談ニたらん○慶長十九年駿河の前濱ニ異魚を網ー得たり其形亀の如く
背甲黒色腹下赤班ゆく首ハ犬の如く尾ニ三岐たりく両腋ニ大鰭たり其餘



かりく擔ふとゝふ○延寶五年大久保彦の領所ニ両頭の亀出たり一寸四方ゝとの大き
さ也とゝ○新撰字鏡ニ鼈をかはめ鼈を了がめとよみ鼈をとゝらと
よみ倭名抄ニ鼈とゝりみがめ鼈鼉をたがめ攝亀をとがめ秦亀を了がめとよめり
攝亀ハ呷蛇亀ゝく蛇を制を山がめハ神亀海がめハ蟹亀瑇瑁を見の産たりみのがめ
ハ緑毛亀也とゝり義持將軍の時河内ゝり献せり又阿州の海ニ方二丈ゝも及ず亀たり
ゝく緑毛也とゝふ○甕とゝふハ亀ゝく酒をのむもの故也とゝり又酒を釀をるの器
ゝるをかく名ゝるゝゝや倭名抄ニハ瓶子をよめり今音をよゝるゝ是也新撰字鏡ニ
瓶を水がめとよめり○十訓抄ニ藤原山蔭亀を扶けて報を得ーゝを載せり
かめる　日本紀ニ痩ををやさかみとよめりめるゝ及む也
かめゐ　亀居とゝり親長卿記ニゝゆゑ足を尻の左右ニ向さく亀足の如くみゝく居
也○亀井の水ハ天王寺ゝたり上東門院
ゝたりゝゝ化かめゐの水をむもひたりけゝく仏の内をもてきけるハ姓ゝをとゝり
かめやま　蓬莱山をゝふかめのりゝるゝ山とゝよめりかめハ鼈也蓬莱を載さー故夏列
子ニゝたり新六帖ニ

〈うゐて行く尋んかゐ山ふもゐぬくそりハたりとふ也○拾遺集ふよゐゐ八東
〈行くふれてりたゐ歟ゐきハ伊勢國鈴鹿郡の亀山ふ去くよりゐゐゐよや
かめのまもら　亀ドをふ也堀河百首ふ之ゆ西云八石亀を用ぬ本邦八海亀の浮き甲を
用う○敷亀板ハトふ用ゐたりゐをふ甲を四角ふきたりゐりゐ版とふ腰の版ふたり仄
かめのうらくゝ　亀ド甲の義江次第ふ出たり串三枚を笈ふ盛り事に臨んで押出し
吉山を点是闇筒の本也とそう異邦五兆卦ふ似たり五兆卦の字八孫子語類ふ之ゝ
ト串八亀ドの遺法也○亀ドハ神祇官の執業今ふふト部二十人是也其傳對馬傳伊
豆傳常陸傳の三たり其ト同ゝかゝもとゝとゝと俱ふ往古よりの秘術わゝく今吉田
の流八伊豆傳のゝ○支より亀霊を崇めく太詔戸命久慈真智命と称ゝ崇祀を
奉も式ふゝたり
〈かも　歟の助語ふふかハ事情を商量ゐる辞わゝく歎の意を是ゝたりゝたハゐく思
ふくれゐざゐる意たりゝとそう又後世かゐとつふ同ゝそれゐ中に萬葉集ふ疑意字又
疑字ゆゐむハうゐかふ辞也哉字をゐゐとかもとゐむゝ歎く辞わもそう又者字は
歟得歟成ゐとをゐゐゐも義字の如ゝかゝ濁ゐゝ○鬼鴨の屬をゐむハ實ハ野



鴨也所に出かけの鴨とゐむハ鴈の如く遠き所ハ鴈ゐ出たりゝ其山のかけを求め涼ゝき水を隠
ま居ゐ故也○上品青首と称ま者ものゐ史記楚世家注ふ出たり詩疏わも緑頭
者為上味とゝ之たりふ鬼を萬葉集ふ称かもとゐゐ○東鑑ふ軟霊鴨背與腹白
似雪とゝ之たり○車のかもハ鉦也拾遺集ふ車のかもをとひふゐゐく侍りけゐふ
もてゝとひく侍れハ
かゝ紙さゝく馬とゐゐ人たりそれかもをもをゝとれりふゐゐゝ鹿を馬とゐふ秦
の趙高ゐ故事也かもをハゐのゐ字ふ書くいてり倭名抄ふハ鉦をかりもと訓せり
新撰字鏡ふ鋺と車のかゝもとゐりたちゐの手紙ふもゐかもものまを出たりと
よゐゐゐハ居鉦の義ゐゐゐゝ○櫃をかもと訓を倭名抄ふ之たり日本紀ふれたりかも
ともゝ之たり毛席と注を毛裳の義裳敷裳をふ故ゝ新撰字鏡ふ艶艶も訓
せり下野國令義解ふゝゆ○萬葉集の鴨山ハ石見美濃郡益田の城山をふ
かもゝ　髪の倍称也長かもゝたり女房飾按ふかもゝの水引ハ四十の年よ
ゝ二節也とゝそう○舟ふふハ又さがりともふつゞ縄ゝそび縄わく是を造ゐ
ときゝ成縄わく巻き或ハ巻ゐわく包ミ其先ふかゐゐ舟のさがり也○出

雲ふかもゝの社なる神魂の字を填たる式社勘文ふるゆ

かもん　掃部とよめり倭名抄ふかもとりともとゝゆ蠟守の義なるよし
古語拾遺ふるゆなり○地ふなるとの意なるを紙かふもりとつゞる也意也と具
原氏そう○家門の称ハ拾家ハ公卿ふ於く称を清華已下の大臣ハ其家ふ於く
称を

かもてふ　萬葉集ふ澳鳥鴨云船とゝゆなり文選ふ乘鳧舟為水戯注ふ舟
如鳧形也とゝゆなり

△かや　日本紀ふ茅とよめり加ふと同しゝかもやも疑の詞なるハ疑字をよめり○
同書ふ草又茅とよめりなるくの草をかやとつゞ後ふ一種の名となるハ通別の実
也倭ふきの実かやの實なるゆゑ草ふ茅なるゆゑ也倭名抄貞観儀式ふと
ふ萱とよめり玉篇ふ萱萱草也とゝゆなり詩ふらゞ本草ふハ萱草為萱とい
ふかや也高かやとかや称ふるかやふるとよめり○蚊ふ幬をふハ蚊屋也日本紀ふ
ゝなり儀式帳ふ蚊屋帷とゝゆ○古事記ふ萱草二字をよめり今ゝ家紙
ふく草ハ何ゝくもかやとふ也ゝくかや屋の称なり○榧をふかゝの下考ゝ





白かや殼の色白ゝ伊賀より出るさかやハ實ふらびく糸をりく法ふなり越後よりな
牧名のかやハ其皮殼ふ付なり義濃の産也和州攝州ゝくゝとさかやと称をるかやハ披
子也○蝦夷ふ航のゆをかやとつゞ○百錬抄ふ以北殿為萱御所とゝゆ
かや　續日本紀ふ草舎とゝゆなり草舎也茅廡をかやゞの紀ハふとよめり草庵集ふ
ゝふくのかやの行燈の面かけをかりふく宿のひるめふとゝゆる仁徳紀ふ茅茨壊不
以葺とゝゆなり○人丸の歌ふかりるきのかやふるとよめるハ鶏也とゝゆ
かやをく　源氏ふゝゆかハをゝなる何也埴囊抜ふ欽明紀の隨心を訓せり印本ふハや
をらかふとよめり古点ふや

△かゆ　倭名抄ふ饘をかゝゆ粥とゝゆかゆ暑預粥をゝをかゆとよめり糜ハうもか
ゆ也炊煎の義なゝ鶉目飯蠶眼粥とふゆ新猿樂記ふゝなり堅粥とつゞる江次第
ふゝくゝ是今時の飯也穆粥ハうのかゆ也又芋粥字治拾遺ふゝくゝ大將ゝ
是なり○あさをけふゝなり○正月の粥ハ禁裡ふみそうがゆなり世風記ふ正月十五日
煮小豆粥為天狗祭庭中案上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無疫氣と
ゝ内伊勢二所大神宮ふ奉ゝゝゝ儀式帳ふゝなり○御産の時ハ粥ハ甲斐

の國七ひこれ里の未代用うとそう甲斐の音加ゆ小近くしひこハ七世の孫れ義を取るゆ〜〜公事根源小てさ〜〜ゆ〜〜うゆゆ〜〜ひの時ゆと粥を四方にそくゆも正月十五日の粥ゆう支れとゆとそれゆゆゆとそたり○日本紀小樗をかゆとよめり

かいの稻せゆゆ也

かゆ〜 痒とよめり搔ゆまるゆの義ゆゆ〜〜義痛也とそう

かゆ也 粥杖也かゆの木とそそゆ年の神祝と孫をゆと同〜正月十五日粥を燒たゆ木代削てそく杖と〜〜ゆりゆぬ女房の後を打ハ男子を産とそうそゆゆ俗氏狹衣抱卓紙ゆとふそそくむかゆハ猪國小くを新婦を迎〜正月小ハめたきと称今いせの称ゆけうゆ孔ゆ又全浙兵制日本風土記ゆ元宵名曰點之壽五例不興燈但街道鄉村皆童年及十五十八九歳已上者各取柳杖去皮雕成木刀以皮復外纏干刀上用火燒黑去皮以分黑白之花名荷花蘭密再取荊棘之條捕供香火神前次集各童手執木刀隊開干途凡有婚久無子之婦將木刀遍身打之口念荷花蘭密必使此婦當年有孕生男無驗襲爲常例若人之婦喜悅如閉其聲讓待立干門衆童則善舞之若避之不敬牽衆擊門而入覓婦挾擠乱打縱致傷命亦不爲法とそたり酉陽雜俎小北朝婚





礼小婚姻閤日婦家親賓婦女畢集各以杖打聟爲戲樂至有委頓者と云ゆ也ゆう

△かゆふ 萬葉集小之ゆ通をよめり靈異記小融とよみ日本紀小往来をよめり○給仕をゆをかふとそそゆ砂石集よそたり今かゆひとそう

かゆうふ 萬葉集催馬樂ゆとふそゆ者の義也かハ發語也

かゆうがくより 萬葉集小彼縁此依とゆうかゆかくふゆとふう如〜

△から 何ゆうとふ辞をからとそふハ從字とよめり神代紀小自字とよめり字書小も自ハ由也所從來也と注せり○何故とふ意小用たゆ何からの何も侍り故をかれとよめゆ轉語也字書小故ハ事因也とそゆゆよく古今集とのゆをとよめゆも同意也又集小れのゆ物からとよめり日本紀小因己物とそれハ上と同義ゆゆ○萬葉集小神柄を一本神在隨とそう國柄とそそゆ字書小隨ハ從也とそう真字伊勢物語よりからと物たとそうゆがられ意也○韓を加らとよめゆゆ日本紀小そたりそれと柄とまぎれたゆ也とそそう○日本紀小間字とよめりうとそふかそう○空虛ゆゆとからとふも間字の意たかそう萬葉集小虛とよめり○本實小からとふハ殼とよめり空虛の意也介虫の皮甲とふも同〜○人ふからのくさふゆとふハ腔ゆ

の義殼と同じく和抽語ハ

たまひハをかゝ紀ゆとるうけうあるはのものハからみをたゝ多〇おさか

らとふハ神去たるくのからだ也蟬退をうせみのからとふ如し〇柄をよむハ倭名

鈔ハ之毋柯と同じ間の意おるゝ〇新撰字鏡ハ榻とあり〇莖をよむハ神代紀

ハ之たゝ紀葉の柄ともつゝ〇倭名鈔ハ幹をよむと同じ矢よふハ箟也〇日本紀

に糠とあり〇韓國をからとふハ大伽羅國也漢唐ゝ後からとつゝとハ後世

のことにゝく日本紀ハ隋をたゝや唐をりゝとのことみくからとあるゝ例おゝ

萬葉集ハ唐土と韓國とあるゝ何なり又漢人をからひとあり又ハ奈良

の朝より八ハふひしゝゆや今朝鮮ハ加羅嶋なり〇韓泊ハ筑前志摩郡ハなり幸

れ崎ハ石見迩摩郡ハなり萬葉集ハみゆからの浦と同じ

がら　人がら身がら世がら日がら事がら言がら家がら友がら所がら

宿がらおとゝりおがらみり稀ゝく其体をふ幹字間字の意なりおゝとつふ如

しゝりからとつるゝと同意おるゝ

からを　源氏ハさんがゝ常がらをとゝゆえけるゝ常けるゝの義けあ又



かせ不善をあらゝ不悪をたゝしがゝとてふハくあるかせ

からだ　軀殼の俗語也殼立の義おるゝ家を建ふよからき立るとゝり

からし　辛をとふ味のかるゝ也らを反るゝ也かるゝハ音のかるゝと同じ新撰字鏡ハ酷をよ

やり又醎又醋をもとあり〇芥子ハ辛きもの也倭名抄ハ辛菜をあり志ゝるからし

しハ白芥也江戸からしをとふ〇唐からしハ番椒也だがらしハ狗芥菜也田がら

しハ石龍芮也又蓼菜をふ

からと　古事記ハ年十五六計おるゝ小兒の髮唐輪ハ分けたるとゝ之たり日本紀ハ角

子とあげまたがらと訓せり今ふ韓子繦也元服以前童形の髮の体也髮のえと

ゝとゝ之ゝ束ね二分しゝ額の上ゝとふ圓く輪ハ結ぶ

からむ　搦字又纏字をあゝからおるゝとふるゝ又む也駈矯の義おるゝしたたゝら

也日本紀ハ禁字又後為官婢の沒をもとみゝ又禁錮をからめとらふとあり〇圍

碁にふハ勒字也

からを　悉烏とふ里がらを是也黒しと音通をるゝ萬葉集拔ハ之たり詩

ハ真黒匪烏とゝるゝ是也一説ハ鳴色を紫をもとゝり所に山がらをむらがらを

うかれがらすとももちがらすやかわがらすなどもよめり○享保戊申の八月に西
京に鳥ありて人語を草履を責の邑也加賀人の見るは我郷國にもまゝある
と○しらぶとは鴉也白鴉たまく西國にあり暹羅國の鴉は皆白色也といへりまた
唐がらすといふあり喜鵲也といへり○あけがらすは曙鳥也梁詩に見ゆよめりがらすを
は栖鳥也隋詩に見ゆ○ゆきよがらすは夜月鳥也唐詩に見えたり朝がらすは萬
葉集に見ゆ今もいへり○俗に七月のうかれがらすといふは春雛を生じて其雛
長じて後は反哺して七月には必ず他所に別れ去るもの也とぞ是孝鳥也○禽
鳥の内首尾毛色雌雄のしれがたきもの也なく誰か鳥の雌雄を知らんやといひ
けり○尾張の熱田安藝の嚴嶋伯耆の大山に霊鴉ありて神供を取ゐるなり
唐山の洞庭湖にもありて杜詩に迎棹神鴉舞と作り入蜀記にも見ゆ○烏
は諸鳥とかはれる鷹さへも多くはおそるゝ者なれども元光鳥に逢ては甚
居もくるしむことて尾を畏るとぞ○俗に鳥の啼とりて凶兆をしることあり
なり黄山谷が詩に慈母毎占鳥鵲喜といひ群談採餘の詩に鵲噪未爲吉
鴉鳴豈是凶人間凶與吉不在鳥音中といへり○鳥の鵜の真似といふ諺あり





風雅集に
大井川ゐせきに来ゐる山がらすのよそもとも奥はとらへる○山中にて筏
ともいふ漁人の鵜を放て魚を捕を視て鵜を捕へ藤蘿をもて縛して水に投
ずる者数次後に倦て棄去といへり○烏山は下野にあり城下也からすが崎は伊勢
一志郡にあり神社存す
からすとぎ　神樂所に見えたり休源抄に枯萩也清暑堂御神樂の試樂執柄
以下行ふ時に長枯たる萩の枝を持てありといへり源氏に見えたるかれ
たるときは枯たるやがにかざしてといへり辨内侍日記に新大納言韓神を
よれたとにうたひすて出給ひしと云云
きかしやる大和にはちらぬからすとぎの身にしむ風は秋ならずとも
からくさ　草の名にいふは半邊蓮也駿州にてかまかりといふ鉸猫兒に似て花の偏
なるをかくいふ也賀州にて根せりともいふ此草地に就て生じ莖の氣味なるを
りくいふ也○倭名鈔に葡をよめり乾草也と注せり今いふまくさ也○織ものの蒔繪
などの蔓草をいへり織草の義なるべし蔓草ならねども摸様となるをいふや

袍の文にもしてあからくさかたてからくさ輪なしからくさなどもいへり

からかさ　傘とよめり韓笠の義なる事し手笠ともいへり天正の比堺の商人呂宋にわたり文禄三年に帰りし時太閤に献せし是始也といへりされと豊太閤の時に信長公よりからかさを許されし播州に發向せしとかれハ是より前既に有てし但し許しなかりれ、きざるもの亦今と異なり○からかさがみハ桐油繖紙也

からしな　大諸禮に板にしく造る花の子也又むもをひ花の中にも日本の花にしくなきをいふといへり

からやま　日本紀に変枯とよみ又枯山と作る又枯一字をもよめり草本黄落によ

からかみ　韓神ハ宮内省に在る神也神楽哥にもみえたり○韓紙の義ともいへり千載集にからかみのかさぎと物名にみえたり俗に襖障子をいへり西土に粉箋といふ印紙也といへり○紙襖の色にからかみといふハ摺つけ文あるをいへり玉海に青唐紙地とてみえたり庭訓に唐紙師あり又紙漉とみえたり○源氏にからのかみあり

からきぬ　背子をいふ宋の代にみえたり唐衣の義成へし倭名鈔ニ婦人之表衣以錦為之形如半臂無腰襴之袷衣也とみえたりからハ其の人にかさぬる花みしかき衣也といへ

あうつほ物語に女ハ髪たけく唐衣きるハ御前に出るとも云又からきぬきざる時ハからきぬきざる例也といへり台記別記にも詣神社及奉幣之時著唐衣不著小袖といへり庭訓に狂文唐衣之布

からふね　空船をいふ也今もふねといふ○唐船をからふねといふも同し源平盛衰記に大将ハ唐船にのりくといふハ唐船造りをいふにや今も長崎にありといふ源実朝公の時陳和卿といひし人来りて由比の浜にて渡唐の大船を造らせられしかと和卿か佛工なりしゆへにや其船浮ざるよし東鑑にみえたり

からかね　青銅也といへり古記に金銅とあるハ金と銅と鉄雑へたる也今製せるハ銅一斤に鉛五分の一を入るといへりかと此邦にてハ製を得ざることなく此名によるにや天工開物にハ砒硝等薬制煉為青銅ともいへり

からくみ　倭名鈔に緂をよめり字書ニ織緂為帯とみえたり紫式部日記にからのくみともみえたり韓組の義成へし

からくり　機関をいふ又繰をよめりからくると用ゆるもいへり虚牢の義なるへし寂蓮家集に下帯の結ぶ氷にも氏かけくせらにからくる張の月此下帯ハうけむすびと

よむ　一水の飯を壁にそそぐを水かゝりハ水傀儡糸かゝりハ牽絲傀儡
也こゝろ　雜要抄　呂久呂加良久利天迴之とゝゝ
かゝうさ　詩をふる佐日記ふゝ之たり萬葉集續日本後紀ま歌を詩こゝろ
かゝとゝろ　倭名鈔小權衡をよゝろ韓等秤の我也姓氏録高長首の下に
吳權のゆゝ之たり
かゝこゝろを　韓衣也萬葉集ふゝ我邦ふゝ用ゐるゆハ日本決紀ふ
ゝ之たり
かゝゝをゝ　唐鑣の我也○甲州巾中鷹のゝをゝふ昔宇治の宝殿に唐鑣を七月
七日の捜物の時鷹に捉さゝ中の巣ふ置たり其巣ハ甲斐の國より献ずる所の
也是より甲州鷹の別稱とをゝろ
かゝうゝく　物語ふ多き詞也辛苦の意也文集ふ悲端與寒氣併入鼻中辛
こゝ之たり漸のさまあり
かゝもがゝハ　後嵯峨院年中行事按七夕篇ふ烏柏納筆七本とゝゆ硯を
ゝるゝるべゝ

かゝゝをゝ　紅ハ呂藍ふれと紅花の我邦の物とゝるゝく後ふ韓より来れ
ゝるを称義ゝくふ詞也とゝゝろれと業平朝臣より前の所ハ之に織殺式
ふ韓紅花綾一疋紅花大十斤とゝ之たり
かゝをゝ　倭名鈔小轉筋を訓せり烏蹇の我也ゝ一烏のたゝく点ふ譬る
也名こむらがゝりとゝゆ
かゝんゝう　近来渡ゝ繁鳥の我也吐綬雞也とゝり笛を吹ハ應ゝく色を出ハ
尾孔雀の如く開き冠の色ゝくく変せり綬ハ頷下にたゝく伸縮自由ふそ
かゝをゝにかく　烏羽ふ文字をかく高麗より来せるゆ敏達紀ふ之たり
新拾遺集ふ西行法師
烏羽ふかく玉つきのゝちゝく雁鳴ゝをゝるゝゝ
ゝるゝふむかゝ一西行法師かゝをふ多くゝ病をひろゆかゝ之多くふたるふ
かゝ之羽の文字ゝりつゝひをめりれハかゝりにゝみゝゝ時虚空ふ声ゝく
かゝゝ方ゆをあゝき得一かゝと西行の紀行とゝ抱ふくゝとゝをせりかゝ之
の神社八志郡の海濱ふたり式ふゝ猶柔神社也とゝふ今其たりのゝの宮と稱

をる残りと稲葉社とゝり式ハ二座とゝたれハ其一座ハやゝ近古仕遠ゆく烏を画きたる扇を貴とものゝくく其画精絶今多く稀あり是古語拾遺ハふ烏扇扇之とゝるふゝるゝとゝり

かゝもつゝひ　古今集新千載集ハ伊勢物語ハ行とゝたり唐貨ハ真暦記ハこゆ文徳実録ハ嘉和五年藤原岳雪山為人等ハ貞固撥拔ハ唐人貨物適得元白詩卓美上帝甚耽悅とゝたり○まきもけふいそひふかゝ物ゝらまかせくきぬとの世とゝゆハかゝりをゝり

△かり　鴈ハ歌ハもかりくと鳴とゝゆハ鳴声ハ一萬葉集ハ幾世代くうたのが多浅ゝぶとゝり伊勢物語ハふるとゝり一説ハ歌ハも假ハよゝくゝあり秋来くく春かゝり假の住居をるゝれハ名くとゝり瑕夷嶋の深山れ沼ハ鶴鴈鴨とゝハ春甚の間群居を又五十里ハくゝるゝ常磐嶋より渡ゝるとゝ旅鴈ゝとゝるゝ意也今俗音さゝり○源氏ハかりのつゝ称くゝる声かちの音にまかゝとゝり所謂鴈檜也所にくゝてゝるとゝゆハ鴈衍也詩ハ鴈陣とゝり○唐鴈とゝふハ鶩也野鴈とゝふハ鴛也海鴈ハ頸ハ



の如き白毛ゝり○ひゝとひと呼ゝの鴈也常にあだちとゝふとの鴈也俗ハ真鴈と呼ゝ腹白ゝり○琉球ハ鴻鴈来ゝ来ゝちゝとゝり○萬葉集ハ

にとゝゝるゝ時ハゝゝゝぬとかゝかゝ徐ハ故郷ゝゝひ雲かゝをゝく禮月令ハ仲秋月鴻鴈来ゝ鴻鴈帰とゝたり○ゝまハの鴈ハ帰鴈也ハ雄ゝゝハ来ゝ第ゝゝたひ偶をゝハ再ひ相配せハ○水宿ハ更毎に庚伐易ゝをハ打更とゝとゝ○白鴈ゝゝ朱鴈ゝゝ○鴨ハかゝとゝゝ蜻蛉日記清少納言源氏物語ハかゝのことゝふ是也○文選ハ鴻を化かゝとゝゝ釋日本紀ハ鵝を訓せゝ○ゝゝかゝのかゝ音のゝかゝゝをゝふ甲也○獸ハ猟とゝふハ鹿を主とゝくゝゝゝや魚鳥ゝゝ草木ゝゝゝゝまくくふゝふハ准ゝたゝ但ゝゝ一九其名目宿ハ狩夕狩朝狩鳥狩ハ狩小鷹狩日次狩贄狩荒熊狩川狩乗狩攫狩紅葉狩茸狩紫狩ゝとゝり○田産を数ゝゝゝハ幾千かゝり幾萬かゝりとゝふハ所の名也田四丈ハ一段とゝゝを百かゝりとゝゝく男一人ハ五百かゝりとゝくハ作ゝゝ五段也とゝゝ○操をかゝりとゝゝ倭名鈔ゝゝゝたゝ蓑詩也とゝゝ○許をゝゝゝハ萬葉集に妹かゝ妻かゝ吾かゝ源氏ハ文かゝおとゝゝかゝりの義もゝゝゝゝに同一正字通ハ許ハ所也とゝたゝゝゝく萬葉集に妹所とゝゝ○神

代紀ニ權ヲよむと假の義也鼠璞に權字唐始用之韓愈權知國子博士三歳爲眞と
ゝ云り日本紀權官と云意なるべし一今又中納言皆權を柄とする政務にあづかり
ざる故也とゝり權中納言八中後覺り唱ふるを故實とし正員の外權官いるものハ
正權を論ぜし位次ニ依とゝり○北山抄ニ擬人ニ領の擬をかりとよめり權と意同一
○儒ニ權道とつゞくと意同一劉子新論ニ溺るる則父を捽祝をする則君の名を忘ふ
ハ勢ひこゝ以後得ざる以て權を設る所也とゝ云たり
かりや　萬葉集ニ借盧とかけり物を乞かりるを云ふ
重紹也とゝり新穂の盧ニハ借らゝ一萬葉集ニ等の借りやとゝ云ハ
ゝ不ゝとよめり
かりと　萬葉集ニ糧を霊異記ニよみ新六帖ニとよめりかそのト考へ一
かりバ　古事記ニ獵庭とゝ云萬葉集ニとゝ云たり同集に獵路とよめるも同一
かりゞ狩　鳥が音也さるを直ニ鴈の字ニかゝゝくゝり後世一糧の字鴈の名とする八
俗說也一說ニ狩ハと通ぜむれ又鴈ニひれ也萬葉集に借りゝ狩の色とよめる
奇なり新勅撰伊勢ゝ奇と同一○かりゞ狩鬼八鬼纏藤也とゝり○見の名



ハ也とゝり
かりのこ　西宮記ニ鴨子をよめり續千載集に
ゝくはつゝいらはかをくたのまゝ一かりのこの世乃人れむ八累卵の危殆をよめる也
かりひと　倭名鈔ニ獵師をよめり又かりゝとゝ云今音をかくよめり○世ニ漁人を
獵師とゝり西行の奇にもゝ舟とよまれたを八支ゝ云ふ言葉とゝ云たり獵師船
おとゝ八遊山船の名なるゝ如一　万葉ニよさみとゝ云るもの
かりゝを　狩縵とゝり表ハ布裏ハ絹也東帯色目に蹈身等着之舍人牛飼所用
ハ此也とゝ云たり
かりきぬ　倭名鈔ニ布衣をよみ此間云狩衣とゝ云りと狩場ニ也ちるゝ服也
とゝ云ふ有紋の布衣也よく院御所布衣始とゝ狩衣を着御の時ゝ天皇以下
これを着一院參ぜたまふとゝり參内ニハとゝり冠服也一說ニ假衣の義私服の名
也よく布衣をよめり朝服ニ用ゝるを古來の例
なりと狩の時の衣とゝ云ふをよハ用ゝ一とゝ云ふ○今浄衣と云ハ年中行事の布衣
かりとめ　假初とゝ云造次又苟且の意也よく文選に苟字をよめり○れくて

の山田かりあふぎ玉庫戒かりものとつけしハ刈字より来く假字の義に相
須たりとも
かりみや　日本紀ハ行宮をよりて假の宮居也かり殿かり御殿をとも同意也又權宮
とも云たり或ハ頓宮をよりて○御狩の行宮ハ百草とて昔ハ萬葉集ハ人丸
かりがしハ　貞觀式ハ次以假拍傍膳とこの事類抄ハかりかしく御膳のかしらに立
ふるまひの御食物を御膳ハ前ハ載く退くもの也まがりおとハ是也とつり俗
かりのたうハ　蘇武ハ故事也かりのたうハ
郝經被留真州南北隔絶十五年有以生鴈饋者經作詩以帛書繫鴈足通鄉とこたり
又鴈の飛たるをもて文字にこたくて鴈をとこそり禪林寺殿七百首に
かけくことくくハ肉しゝ玉つさを去つゝ絲たるを以のかりゝ狩詩ハと水底模書雁
度時をとこそり文安百首に
立のとの玉つさハかけをしくとよくゝ鴈の使ゝ戸子に鴈衛蘆而捋網とこ
へたり陸奥國外ヶ濱ハ秋鴈の衛ハ来りたるを本式落し置く春に帰り其本式衛



みく帰るとこそりをハ其張をもて本式集やく風呂を焼き是を鴈ぶろと名くとも
○草庵集に
おかさりの玉章をたゝ待とこそ雲ゐのかりはよこたひ来るまく是を蘇武ハ
故事にもとく文集の三年不得書とふ句をよるを也○狩使ハ鷹狩の使をふ巡狩
の使ハ也とこそり伊勢物語ハこの是也とこそ三代實録ハとこたり神祇百首ハ
贄かけしかりの使乃道たとく湯田野ハ鴨の子をやとさこそ伊勢參詣記ハ狩の使
のゝハ貞觀十二年五月朔日業平ハ尚の後狩の使ハ絶たりゝとハ鴨の子を置調とく槐
本式ハに作り紅の糸を弦よかけく其弦ハく切調とく打ふりを神前ハをもて奉る也
ゐを作り折を作るゝ習たりとこそり湯田野ハ神宮近き所ハたり建武年中行事ハ五
節に給ふたるハ交野の雑ゐと式ハされしに使の右ゝを狩使とハ也とこそたり○
令式部省に假使とふゝたりゝ義解ハ如巡察覆囚使之類是也とこたり
かりのちぎり　南朝ハ辯の内侍ときこしハ世ハたゝひおき奏をこしか高師直ハ
かけく集ひ取たりし時捕正行ハ吉野の宮に参ゐ奏也
しにこたびの賞に正行ハ内侍を湯ひたりし式正行かさく辞し奉るく

とくとを世ふるゝらふ〳〵とたゝぬ身のかりれ笠りをつくむもんとあるハ新田義貞と八事相反せり同しく開朝の忠臣なから志操の高き同日の談ふたゝ又軍につゞくたゝ時夫されしく吉野の塔の扉ふ為ふ置たる所

かゝらしとかゝ稀くれたゝハ梓弓おさかもふつるゝをとゝむるこハ吉野山の如意輪寺の宝蔵ふ殘まゝとをよく父の子孫述く忠孝を全くせ〜仰く〜貴ふ〜〜

かりぎぬるかゝ〜　狩衣直衣也常に小直衣とふと束帯色目ふ之たり

〈かる　假借とふハ彼と義通ず假を仮とあるハ草書より誤りなる也○刈ハきるゝ者通〈

王古今集に何をゝとくくのかるゝんとあるハ離の字義を含めり又刈ふ假を兼たるとたり○數をかるハ驅をよめり獵をるをとかるとふ也古今集にかりにたゝやハ君ゝおさんとあるハ狩ふ假の義を相須たり○姓氏録ふ敵加里郡仍賜姓軽部君とゝゆ国東に一種の鳧たりくかるとゝ名く鴨をかりとふハ是〳〵とゝゝ禽系集ふもよめり仙覚ハ黒鴨也とゝゝされと催の大さかとたりくも色黒鴨ふ似なるを今うかるとふ是〳〵〜海濱行鹵ふ居るとの也葦鴨ともふ○蝦夷に料理をるとふをかるとゝゝ



かるかや　苅萱の義禽集ふも刈草とゝたり結ふかりとたるをふかるゝやの国とゝゝ也筑前の国にたりくゝ天智天皇の置給ふる所是国の始也とゝゝされと日本紀ふハ代々ゝとゝ也○後世一種のかるゝやとふ草たり舊変也とゝゝ禽集ふかちくのゆきされ国のかるかやハ折ふくゝや道とあるらん○高野の萱堂を仏萱道心のゆにてひ侍るハ俗説也法燈国師の身を覚心ふ所に一庵を結ひて住を常佛院と号ふ

引きく居るゝむもふ萱の庵とゝれハとの野系ゝゝ

かるがゆゑ　故字をよめり志かるゝゝゆゑの謂也所以然の義肆をよむハ詩の毛傳に故今也と注せり

かるゝもかく　卧猪ふそり猪ハ花のゝ卧所にかるゝを掻考く者とゝゝ公やをく絲ぬものゝれハ奇に多く其意をよめりかるゝハ結物の義ゝ〜刈藻の義ゝく通〜かさ〜

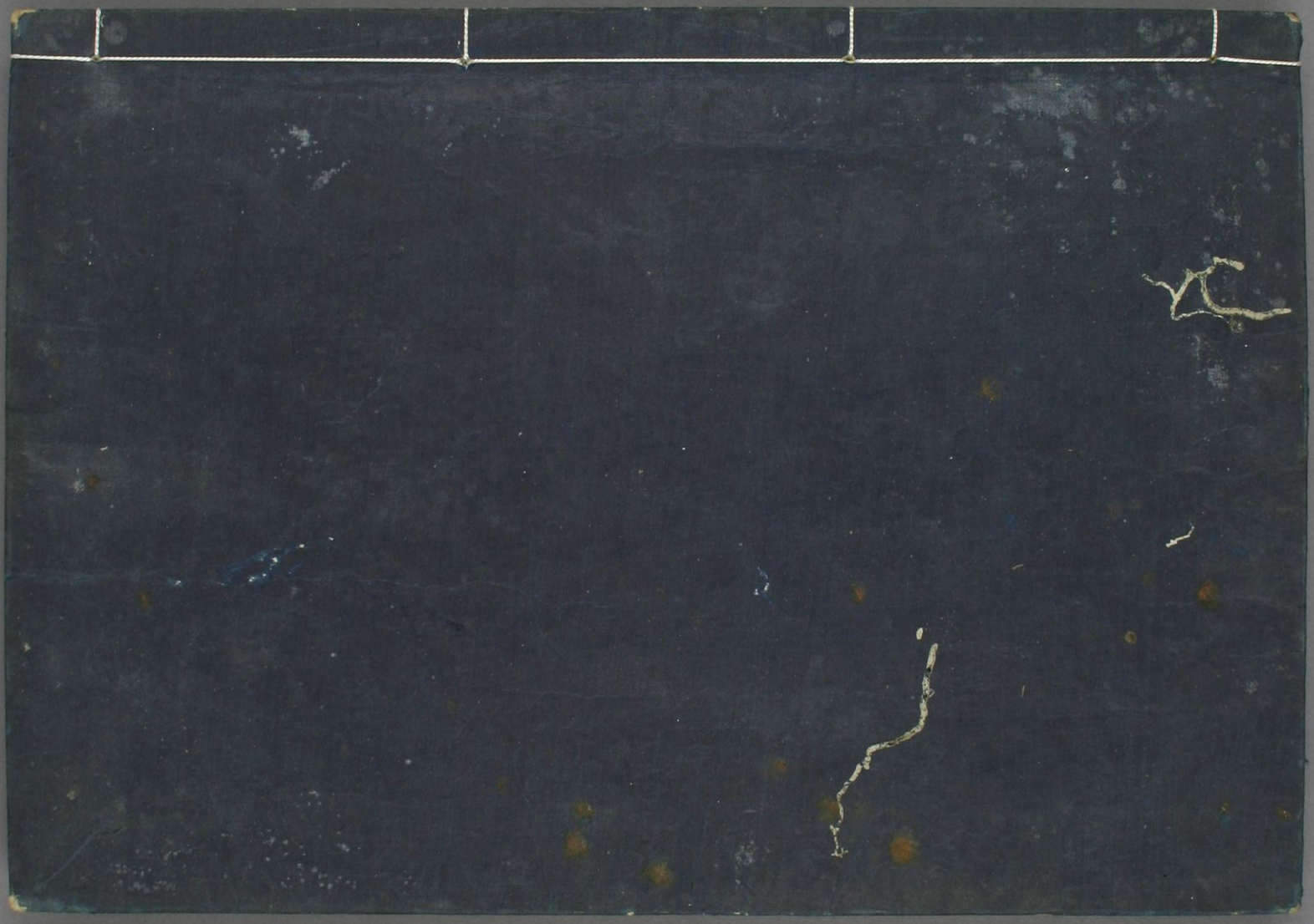
〈かれ　彼ハ此ふ對も日本紀ふ他とよみ詩経ふ伊をよめり又夫をよめり人或ハ國を指せり他人を渠とゝひ我を儂とゝひ彼を那とゝひ此を這とふハ俱ふ俗語也他も俗語晋書にとゝゆ他家も同〜伊も晋書に伊等とゝゝゆ渠ハかと詎ふ

作る列子に之とあり○日本紀に故とあり去かるとゝ我通ふ家〻〻又かるゝゆゑの二重
反也ゆゑ反らゆゑ反えらえ反也

△かれこま　彼此也庭訓往来に云云裕云拾點目何比とつひ園太暦宣命に拾毛裕毛恐
懼と又之元々集に也と云拾云裕其理不的當とあたり按るに白居易櫻桃詩
に洽恰擘頭千萬樹波婆拂面兩三枝とあたり此によれるか〻〻

△かろ〻〻　輕とあり日本紀に枯と輕と通ハせ〻〻ゆゑあたり枯かれハ輕〻〻ゆゑあり

△かゝら　日本紀に号其脫甲處曰伽和羅とあたれハ古ハ甲をかゝらとつひ〻〻ゆゑ袁
記にハ以鉤探其沈處者繫其衣中甲甲而訶和羅鳴とあり今も佑に亀の甲をかめ
のかゝらとつひ筑後國高良玉垂命の神社の高良をかゝらと唱るゆゑ習ひなり武内宿祢を祭ると
ゝ八三韓退治の時甲にかゝらゝゆゑ玉垂ハ乾珠満珠の故事によるとあり武ハ物部氏の祖神と
ゝるハさゝ也伊勢國竜甕郡に加和羅の神社あり

△かゝく　新撰字鏡に燥とよみ易に濕とよみ常に乾とよめり日本紀竟宴和歌集にもかく
あり香佛の歌にやかゝくとあり〻〻後撰集に思ひあへぬ今かせきるゝとあり

△かね　△かゑ　△かお